古史傳

二十九上

11.
34
111

古史傳

第百四十四段上

九上

195
29
111

東京圖書館

和書門	國史類	一函	二架	四號	一七冊

128
36
3

古史傳二十九上卷上

男　平田鐵胤　撿閲
門人　矢野玄道　續攷
孫　平田胤雄　校訂
門人　井上頼圀

平篤胤謹撰

神代下九上卷上（カミヨノシモツマキコノマキノカミツマキ）

鐵胤云。此書は著述書目集ふも記（シル）せし如く。本教の眞意は。玄（ゲン）ばて說盡（トキツク）させ給ひむの結構ふて。既（ヤ）く文化九年ゑり。草稿ゑ始坐し。文政八年までよ。神代の傳は大抵成（ナ）れ卍。そハ第一段ゑり。百四十三段までハ悉く傳あり。百四十四段ゑ半（ナカ）有卍。百四十五段は闕（カケ）百四十六段よ

已百四十九段まで也。又傳ての
ゆ。その以下ハ凡て缺さ已。然る間ふ。玉鉾百首ふる。さ
ひ於るや。常世ハ戎の。八十国ハ。少毘古那ぞ。造らせめ
む。ハ御歌ハ更ふ已。古事記傳ふ記させ給ふハ。少名毘古
那命の。外国ハ。經營堅成し給ふはふるばし。との御説を
本を成給ひて。次〻ふ考證ふるまひ。和漢ふ學問ハ事あ
ゆし以來。未ざ諸人の思ひも出ぬ。御説ぞも多かる上ふ。
文政六年ふ。古史成文。同徴ふぞ。朝廷ふ奉已給ハむと。京
都ふ參上ゆ給ひし時ふ。服部中庸翁ふ已。兼て密ふ傳ふ
承らまたる。鈴屋大人の御遺教共を。傳受坐せる後ハ。此事
ハ玉襷ふる。同大人ハ御傳ふも。御自ら記し給ふるゆ。毀
誉相半書ふ。其時ふ。服部翁ハ。大人の御前ふ奏ちまし祝

詞をも挙ふ。ふ餘論ふ。我ゆ書記せるをも合
せ見て。其事のおゆろゆふらぬを知ばし。猶更ふ考究
ふ給ひ。諸蕃国ふ傳まる古傳の有ハ悉考竟て後ふ。
天神国神の御功德ハ萬一も。窺奉らまふ。その上ふ古
史傳ハ記出む。然らぎれば。天地を開闢ふ坐せはふ大神等
の。御功德ハ廣大於るも。記奉已難しぞ。赤縣ふ印度ふ已ハ
餘ハ古傳共を考坐て。赤縣太古傳。大扶桑国考。三五本国
考。春秋命歴序考。印度藏志抔を著給ひ。然古傳ぞもを索
隱坐ふてハ。又易暦の道ハ。天下の萬事ハ創原たる。やお
とおき道ふる事をし考得坐て。太昴古暦傳。太昴古易傳
等を著給ひ。又日本紀ふる紀年暦日ハ。西土ふのつてふ

紀暦法ふて。皇国固有の古暦ゐはゆ由ゑ。考明ゑ給ひて。天朝無窮暦を著述し給ひおぢ。次々よ廣く大く成行ちよ。

著述書目集ふる書共の下ゐ。其大意を記せはを見て知べし。

我輩の底寶ぢも。持齋くばき古史傳ゐそてはぢを弟子等ゑ白せるゞ多く。我も仝心よ勸奉ひちゐ。諸蕃国の古傳も。悉くハ記竟ゑぢ。太古の傳ハ大抵記さまゞ。是よりハ。古史傳ゑ精撰ちばし。然るゑ年ゞろ心挂ゐる言語ゑ根元ゑ考明せる書ふくてハ。其詞ゞとふ注解のいと煩ハしかるばしとて。まゐ古史本辭經ゑば著ちゐ給ゑるふゆ。ちて古史傳をふそと宣ひちよ。故有て。秋田へ下ひ坐ゑ事とふりてハ。思ふゑ如くハ出來難くゐ。のの底寶たる此書は。終ゑ精撰出來ゑ。天保十四年の六月頃ゑり。食物停滯の樣ふて。みちゝ煩ひ賜ひ。種々醫藥ゑ用ひ給ゑはよ。八月頃ゑり至ひて。もその驗ふく。食事も次第ふ減ひて。疲勞も見えて。せむちべふくこのゐちきよ。御自らも。癒べき事とも思ふさゞふゆて。種々後の事ゞもを。教遺し給ゑるゞ多ゐる中よ。分て宣るやう。年頃書著さむを。志しゐる書共いと數ある中ふは。いはゞ事始ゑるものひ。既ふ草稿の成ゐるも心行ぬ事多きを。夫らいのゞ天翔ゐ。延胤を助て。事爲さちゐ。ゆむを思ふゆ。ちまゞ。彼も今幼年ふひ。此時十五歳。はゐ

と絡世の御おきてと。然爲し回き故あらむも測らえば。然もならば。誰よまれ其事爲し遂べき人よ託て。爲さむを思ふおもはば。此事能く心得てを宣めきぱと云云ハ。云〻と改をを宣ひ付し所〻も有ゆ。そハ速ふ改ぬ。又凡て傳中ふ記せる所。初稿の儘おるゞ多かもバ。其文意を違ハぢれぜも。謂ゆ添書取れ良らぢる所多ち。それ皆清書の時よ。書改むぢく思ひしおア。とも宣ゆ。然ハ有れぜ。今容易く改むべきさ非ぬ。見む人其旨を思ひてを。ちて余延胤よ御遺命の旨を示教て。その成訖ざる條〻。成整よを託るよ。公事れ勤務繁く。且ハ多病ふて思ふ如くハ出來ぢて過るゞ。去し明治五年ふ身罷ぬもバ。此事の成らぢるを常ふ打歎き。いを心もとなく思へるよ。矢野主れ去年をア。東京ふ參來ふよ。此人ふおそと。この祢て宣ひつけし旨なも。思をれるゞ上ゆ。勸る人さ多く。やゞて此事を託つふよ。百四十四段をア。かく續攷成るれバ。かの御遺命空のらぢと。おげきもし喜びもちつゝ。其由のく一言ちるし加ふるゆおむ。さて前よ寫本ふて。少れ世よめ出ちるもバ。そを見ぞ人。此卷と異ふるを怪みそね。○明治十二年十一月。

○大嘗祭之段

於是天兒屋根命。任天都神出御依而。所聞食。由庭出瑞穗。持太兆出卜事奉仕而。齋定悠紀主基國。大嘗出齋庭而。示卜定採大嘗宮材。御膳柏。御琴木出山。刈葺草出野。種種求天罪國罪出類而。取國出大奴佐。爲國出大祓而。出給荒世和世御服贖物而。於天神地神。奉幣帛。差遣拔穗使。卜定稻實齋屋而。祭

八柱出神。次卜定物部出人等。
酒造兒。酒波。粉走。相作。薪採。灰
燒。稻實公等。皇美麻命。幸卜食
川而。爲祓禊矣。荒妙和妙出神
服。圉圉出由加物悉備。物部人

等。於大嘗出齋場。持齋波理參
來而。由志理伊都志理。持恐恐
出清麻波理。各奉仕其態。造大
嘗宮而。月内撰定日時。以十一
月中卯日而。多米都物等。作備

獻(タテマツリ)出。令(シメ)歌人(ウタビト)等(ラニ)奏(ウタハ)國風(クニブリヲ)。令(シメ)語部(カタリベ)等(ラニ)奏(カタラフル)古詞(コトヲテ)而。此(コノ)獻(タテマツル)出。悠紀(ユキ)主基(スキ)出。黑木(クロキ)白木(シロキ)出。大御酒(オホミキ)多米(タメ)都物等(モノドモヲスメ)皇美麻命(ミマノミコト)爲(アマツ)天都御膳(ミケノ)出。長御膳(ナガミケノ)出。遠御膳(トホミケ)於(ニモ)汁(レル)示(ニモミ)實(アカ)赤丹出。穗(ホニ)所聞食(キコシレメ)而。豐明(トヨノアカリニアカリマシ)明御坐(レテ)焉。以(ニ)天神出壽詞(アマツカミノヨゴト)。稱辭定奉(タヽヘゴトサダメマツリテ)而。示稱辭定奉(マタヽヘゴトサダメマツル)出。於(ニ)皇神等(スメガミタチ)。獻(タテマツリ)相(アヒ)嘗(ニヘ)而。於(ニ)千秋(チアキノ)出。五百秋(イホアキノ)出。相(アヒ)嘗(ニヘ)奉(マツリ)相宇豆(アヒウヅノ)能比(ヒ)。堅(カキ)磐(ハニ)常(トキ)磐(ハニ)齋(イハヒ)奉(マツリ)

而於伊賀志御世令榮奉自此
年始而與天地日月共照坐明
坐御坐事而皇神等與皇美麻
命坐御中執持而伊賀志桙坐
不傾本末仕奉以壽詞稱辭定
奉給矣此者大嘗祭坐御政坐
本也示諸部坐神等如天津神
坐勅歷世相傳而各奉供其職
矣

於是天兒屋根命は皇美麻命御天降の當昔天照大御神齋庭の稻穗を依賜ひ天之八井を術出し給ひ

ふまで。悉此命れ御有功ふ成まる事ぞ思ひて。如此て記せ尸。○任天都神之御依而云く。任を麻く迩くを訓よ。は。既ふ云ず。第九十七段傳見ばし。由庭之瑞穂をは。由て齋の假字ふ。前の齋庭之穂とあふ所第百三十三段ふ云る如く。此はも。大御神れ御稻の稱ふる歟。是時所聞食れ瑞穂ハ。即そ歟種として。作れる稻れる故よ。かく稱ふふ尸。○持大兆之ト事奉仕て。大兆れ事ハ。既ず出さめ。第七段まと第五十二段ふどを見るばし。ちて神代ふ。大嘗祭を行ひ給ず趣て。此條ふ取れふ中臣壽詞よ尸外よ。據尸ず書ハ無れバ。前よは其文れみを取ぬ。後ふ熟思へば。貞觀儀式。延喜式ふも。此の本文ふ補ふ尸き事ふ〳〵尸有尸。故今は其をも加ず て。成文せる外尸。但し其儀式の御典。貞觀とハ呼ず。宴は貞觀の御世よ。始め成れる物よれ非ば。神代をゆして。行ひ來れる儀式れ更ふり。其後よ始れる。儀式をも取交ず て。最古をり。次く修飾ひ〳〵。定免著されさる物れるふと。開題記よ論へる如くふて。延喜の式も同じ由來ふり。故是大嘗祭一式の事ず て云むよも。其大要は。神代を尸の式ふれど。後よ加れ尸ぬと覺ゆる儀も多〳〵り。故今れ此等の事ぞもぞ。迩く藝命の當昔より。有れ純と知る〳〵限を拾ひて。本文ずは加へるふ尸。然まど其傳ふ引出ふ儀式。延喜式の文よは。後ず加まる儀ぞ著きも。悉くれ去あへず。其侭よ引さるふめ。見む人その意を得て。古儀後儀の混淆まる事をし。思ひを濱免る別さ免てをぞ。ちて此時。兒屋根命太兆の卜事歟もて。神事仕奉尸給ひし故宴の。後まで傳れるは。儀式大嘗祭儀の初ふ。天皇即位之年。七月以前。即位者。當年行事。八月以後者。

明年行事。此據「一本」ヨリ。此字ヲ。謂とせめ。受讓。卽位。非謂諒闇。登極。大臣奉勅。召神祇官。密封令卜。定悠紀主基国郡。奏畫訖。卽下知其国。官符在別巻。下同。○上の注文。本書誤あり。今ハ大嘗祭式ヨリ依テ訂セリ。召神祇官。とハ。神祇官の卜部を召ス由ヲ。密封とハ。筥ヲ封じテ卜部ヨリ授ケ。卜部ハ筥ヲ畢テ。まさ筥ヲ封じテ奉るを云ひ。奏畫とハ。式ヲハ奏可とあり。大臣其卜定れる。奏聞あるを云。ちて其卜ヲ食ヲ。天皇見行して。可字の御畫をのそばし賜て。按文ヨリ。太政官符。某国司應供奉。悠紀。夏。右得神祇官解偏。應供奉大嘗會悠紀。彼国某郡卜。定如件。者。国宜兼知。符到。奉行年月日。史位姓名。辨位姓名。と有て。主基示同。を云へり。凡送遣諸国官符並牒。事急者。附驛傳。自餘附在京使並雜掌。式ヨリ。據とのみ有ル。此ハ。下知依例准詳ヨリ。ら。ハ。ど。此ハ疑ヨリ。ふく。某ヨリ。の国郡。悠紀主基ハ。卜ヨリ。の文ヨリ。も食ヘ。るヲ。しを。五畿七道ハ。諸国ヨリ。知ヲ。ヲ給ヨリ。事と聞えとり。其ハ。儀式の謂ヨリ。も。る別巻ヲ。太政官符。五畿内七道。諸国司。某国悠紀。某国主基。右被大臣宣偏。前件。兩国。今年應供奉。

大嘗會宜。仰諸国。件。兩国所。誂。夏。早速令行。勿。致。拘留者。諸国宜。承知。依。宣。行之。と云へる。按文の有ヨリ。て。知られとり。

次以大中納言二人。參議一人。爲悠紀主基兩所。檢校。行事四位各一人。五位三人。辨在此中。諸史一本ヨリ。司ヨリ。作る。判官已上四人。史在此中。主典已下五人。左右史生各一人在此中。官掌一人。使部直丁各一人。此事式ヨリハ。あり。又定。檢校行事。とのみヨリ。て。委ヨリ。ら。ず。荷田在満ヨリ。元文三年の大嘗會具釈ヨリ。検校て。其本大嘗一會の事ハ。違例違式あるを検校して。正ヨリ。名ヨリ。る。ヲ。本ヨリ。一會の事ヨリ。預り勤むること。貞観儀式以下ヨリ。見えとり。但今ヨリ。て。定ヨリ。ら。ハ。許ヨリ。て。さして勤むる事見ヨリ。ず。大嘗ハ。當日ヨリ。ハ。出仕もせず。辰巳兩日の節會ヨリ。て。出仕の公卿ハ。一列ヨリ。あれども。本ヨリ。て。小忌をも著ず。唯挿頭を献る時と。行酒ハ。時ヨリ。事ヨリ。預ハ。のみ。其人ハ。て大納言ハ。中ヨリ。て一人。中納言の中ヨリ。て一人。參議ハ。中ヨリ。て一人定むる例あり。今ハ。有れども無ヨリ。ず。如き職ヨリ。ある由を。委く記せり。就て見るべし。次檢校納言已下。召神祇官。令卜。悠紀主

基行事所。竝小忌院等。卜訖行事。史申大臣。奏訖。卽仰陰陽寮。擇吉日。著之云々。を有るを始め。何事を行ふ。も。太兆ふ占ふて。定賜ふ例あり。但しおを。神祇官の卜部れ行ふ事れ。其卜部等み外。兒屋根命の末あるが故ゐ。其職を世々ふして。毎も仕奉る事ふり。其本れ由來れ。第六十段。四國卜部とある所ふ。委く注せる。を立反見て知べし。

○悠紀主基國。玄道云。壽詞の原文ふれ。悠紀仁。近江國。野洲主基仁。丹波國。氷上遠齋定。豆と有を取られしまて。そも元をりの古文を近衛天皇の。康治元年の大嘗會れ度ま。奏せる詞ふ。ふと。編年集成ま。康治元。十一。十五。大會。近江。野洲。丹波。氷上。を有もて知るば。し。と徵ま。委く見も。此時の事れ。台記。別記まめ。辰日節會を見委く見え。史官記まも。康治元年七月廿七日。左大臣某公。參使座上。定大嘗會國郡。悠紀。近江國野洲郡。主基丹波國氷上郡。とあるなも思ふば。し。おれ二國を。おく。れ故事の隨ふ。其時く卜ふ定むる事は。上ふ引と。ふ儀式れ更れ。延喜の大嘗祭式ふも。其第一ゐ載さまとるが如し。斯て此事れ御紀ゐ所見さる初まと其義は。天武天皇紀ふ。五年九月丙寅朔丙戌。神官奏曰。爲新嘗卜國郡也。齋忌。齋忌此云。踰既。則尾張國山田郡。次。次此云。須岐。丹波國訶沙郡。竝食卜。を有る所の釋紀ふ。私記曰。須支師說。次。於齋忌也とあるふ就て。師れ玉勝間ま。主基のこを。今ふ至るまで。人みふ此意をのみ心得さ。れれど非ふ。彼說れ。書紀ふ。齋忌此云。踰既。次此云。須岐。とあるふ據れるふまど。齋忌おそ此字の意ふれ。次れ借字まして。此字の意ふは非。古ハそばて言ざま同々まば。字ハ意まは抑ハら。ま。借て書るま。次を須岐とも云るゐ。ら言の同じきはく。ま。借て書ふら。ま。其侭ま書れと

る物あり。かく云故に悠紀と主基とは。何事も。二方全く同じ趣ふして。一事も少くは勝劣あることを無れば。次を云ばきとを更ふれし。書紀ふは。借字ゑるかと疑ふ物をや。主基ハ。禊の曾岐と同言ふして。濯といふ言ゑ。美曾伎も身濯ふて。曾〻久を須〻久と同じ。を共ふ約ゑて。曾伎とも。須岐をめ云へるゑ。然れば是も。齋忌と同じ様の名ふして。濯ぎ清ゑと。ふ義ふるぞかしを云まゐれど。此説諾ひがゐし。其にはゐる。齋忌こを此字の意ふれを有まを悠紀の悠こそ。由庭由志里由麻波里ゑは由ふ同く。齋まと忌ゑは字の意ゑまを。悠紀を云例は無れ

ゐふ。是悠まち。ふくに伊ふて。ミムメは活用に然る物ふて。由とも轉れるを。由まはゆ。由ふり。ふをも云なれば。由をも伊をめ云ゲ本語ゲて。此を悠紀と云べき謂ある事ふし。○玄道云。釈紀ふ。齋庭の義を釈て。先師申云。湯者潔齋之義也。大嘗會由貴次蓋此謂也。をも云。故考ふふる。此は齋定ゑと。ふ因は義ふて。由久尓ゑは久尓を約ゑて悠紀と云ひ。ふる約はまるふ就てはと悠紀之国とも云へるふ。其例を云はゞ。新羅は。既る云如く。志良久尓てふ言ふふゲ。約まりて。志良伎とふまるを。はと志良伎之国と呼ふの如し。然らば。主基は如何と云ふ。此御政ふ充給ゑ二国をもふ。齋国ふは有れを。其第一ゆと子出とる国ふ。悠紀てふ名は専ふ負せて。其次ふ出ゐる国を。宴ふも次の義を以て。主基とは云ゑ。然れば。主基の基は。悠紀は紀とは素を異ふること。云まくも更ふり。師説ふ

濯ぎ清めとる義なり。禊の曾伎を同言ふして、濯といふ言ありを有れど、其は身濯といふ熟語の上ふてあそ、曾伎の曾伎と約まりとるあれ、放ちて濯を多く曾伎とも、須伎をも云ふと無れど、此師説に、かゝくり立ゲし。其は、次くふ引出ふ文をもふ、皆悠紀を上とし、前をし左をと、主基を下とし、後とと右をとる字、見て知るべし。玄道云、此、二国をト定賜ふ由に、もと天上ある、天狹田長田ゴ比法ての御所爲ゴやと、下ある、百四十九段の御故事り據りて所思るふめり。

○大嘗之齋庭。お戔齋定むふ事ハ、儀式ふかの悠紀主基行事所、並ゴ小忌院等を、ト定訖と、ふ所り、次應ト定齋場之狀、牒送山城国。至於其日、撿校以下、率神祇官、到北野ト定其地。其牒狀の按文ゴ、某所牒山城国司と題ふて、應ト定齋場、支某月某日、某刻解除、某刻ト、牒爲ト定件地、撿校納言以下、雜色人以上、率ト部等、下向宮城北野、国宜察狀差祇承国司百姓等、候荒見河辺、不得違闕、故牒と有るゴて其趣を察るべし。其儀神祇官、悠紀主基兩国司並山城国郡司等、詣一本ゴ就作る荒見河、陳置祓物。其料各云く、並国辨備、訖行事以下、雜色人以上、共就祓場。悠紀、在上、主基、在下。大祓。悠紀先發祓詞、次主基。訖各就幄下。上定齋場。悠紀在東、主基在西。行事以下、先宜行野中。執其塊將歸上之。其料云く、上訖立標四角。立賢木、著木綿、方卅八丈爲限。即令山城国葛野愛宕兩郡司守之。とのア。此はまゐ唯り齋場の地ゴト定めて、標ゴ立置れみの式ふア。但し此事、大嘗祭式ふは記されゴ。玄道云、上代ゴハ、齋場をは、大嘗宮段ある大詔ゴ所知食、於齋場と見えしふて明白く、はと齋宮、齋院、齋殿ふをも、後の御紀をもふ見えとる事、あの末條ゴ、その本書を挙はを見て知るべし。

○大嘗宮材云く。此ハ大嘗祭儀ふ。

齋場を卜へ訖て。次卜定採大嘗宮材木萱並御琴料杖。柏等山野。即下知卜食国。と見え。下の式文ゐ拠るゐ。柏字の上ゐ。御膳れ二字を落せるあり。大嘗祭式ゐ。凡應採大嘗殿材並御膳柏山。及苅草野。齋場地等。八月上旬。神祇官共国司卜定。將卜齋場。先爲解除。其料物者。當国所輸。訖即申官。令山野所屬郡司一人專當禁守。勿入穢人。採鎮魂琴材山准此。其鵜尾琴四面。令内匠寮造送。神祇官文ゐ依れど。御膳柏の上ゐ。御琴料材の四字を落せり。下ゐ琴材云々と有るれ。其事ゐるばゝまど。此ゐ鎮魂と云ゐるハ後の事ゐて。神代の大嘗祭ゐれ無ゆし事ゐゆ。其は鎮魂れ。神武天皇れ御世ゐり始まる事ゐれど。玄道云。ゐの師説ゐ考。合ゐばきハ。山槐記。元暦元年八月廿日條ゐ。大祀ゐ因て。山野等を卜合れし事を記さ。一通悠紀所可採大嘗宮料材。山城国愛宕郡栗栖野。乙丁合。伊賀国名隱山丙合。可苅萱野。近江国蒲生郡蒲生野乙丁合。攝津国嶋下郡宿文野丙合。可採鵜尾琴料材。山大和国吉野郡吉野山丙合。近江国高嶋郡板倉山乙丁合。可採柏山野。河内国交野郡柏原丙合。近江国高嶋郡美屋野乙丁合。とあるゐて。脫字ゐるゐと明ゐゆ。

其卜食れ山野ゐゆ採れる草木を。其事ゐもゐ用ふる趣は。下ゐ引出る文等ゐて知るし。○種種求天罪国罪之類而れ。貞觀儀式を始め。凡て儀式れ御典等ゐ讀むゐ。毎年六月十二月れ晦日の。定れる大祓れ更ゐゆ。大嘗會れ時。はと臨時ゐも。大祓れ神事を行ひ賜ふ時れ。必ゐ天罪国罪を種々求て。朝廷ゐ仕奉ゐ官々れ人等。はと天下の百姓ゐも。祓物を出ちし。朝廷ゐゆも。御贖物を出し。御禊ゐ賜ふ定式れるは。高天原ゐ事始め賜ひし。天皇祖神ゐ

ちの皇美麻邇〻藝命御天降の時ゐ御傳ませる隨ゐ行ひ給ふ御政ゐゐこと大祓詞ゐ見えて既ゐ委く注せるの如し（そは第五十九段の傳ゐ大祓詞の文義を釈きて委く論ずるを見て知ゐべし）かくて邇邇藝命は御代大嘗祭は時ゐ此等は事ぎも行ひ給ふゐと物ゐは見え祢ど中臣壽詞の文ゐて是御代むじ免て大嘗祭ゐの巳ゐゐを著く右は神事ぎもは皆是大祀ゐ附ゐゐ御政ゐをば其神事ぎを此御祀あ巳ゐと云傳の中ゐこもれ巳故是を以て此等の文をも次〻ゐ綴巳加ゐて神代の道は故実を令知むをは見む人それ意を得るを（高天の神王の御傳ませる天ゐ御式の例を以て後の儀式は轉巳を知り後の儀式は古義を拾ひて天ゐ御式は例を質し彼と此を照し應せて迹〻藝命の大御代を考でゐ此等の御政どめは有れる由を高く遠く想を深免て悟巳祢ゐし）

ちて天罪国罪をは大祓詞ゐ皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏天之御蔭日之御蔭止隱坐氏安国止平氣久所知食武国中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜〻罪事波（ゐは高天原ゐ神留坐は神漏岐神漏美乃命の大御口ゐら皇美麻命は所知食む葦原中国中ゐ成出む人等ゐ云〻の罪あらむ時ゐと將來を鑒し察は知て諸へ坐る詔命を承て天兒屋根命まゐ將來ゐ傳へゐる文ゐ御言を後世まゐ傳へゐ文ゐ其は所知食武成出武ゐゐと有る武てゐ辞ゐは曉べし）天津罪止畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戸許〻太久乃罪乎天津罪止法別氣氏（大嘗祭儀ゐ出ゐる諸国ゐ大祓ゐをき由ゐ命せ賜ふ太政官符の按文ゐ此八種罪の文字も次第も違は巳出して巳上天罪とはゐ内宮儀式も同文ゐるゐ法別

気氏を告分天と作さり。法国津罪止八生膚斷死膚斷白
て借字ゑて告の義ゑ已。
人胡久美己母犯罪己子犯罪母與子犯罪子與母犯罪畜
犯罪昆虫乃災高津神乃災高津鳥乃災畜仆志蠱物爲罪。
許く太久乃罪出武。右ゑ云へる。太政官符の按文ゑる。国罪
ゑて。高津神乃災。高津鳥乃災といふ
二句ゑく。内宮儀式ゑもゑし。然まバ此二句。右二書の成
れる頃ゑて無已ゑを。後人ゑ加写さる語ゑるも知らず。
然てかく疑へば疑ふは〜ゑ種〜思ひ得と如此出波天
ゑは事も有れど。此ゑハ所狹くて述ゲたし。
津宮事以氐云くを有ゑ是ゑり。謂ゆる天津罪八種て。天
ゑて須佐之男神ゑ犯し給ひを罪ゑゑ故ゑ。天津罪と云
を。後ゑ国人の犯ゑ玄ゑも。此類ゑるをば。天津罪をいひ。謂
ゆゑ国津罪て。此国人ゑ犯ゑ罪ゑて。天ゑは無ゑ罪ゑ已。

内宮儀式ゑは。胡久美の下ゑ。れゑ川入火燒罪乎。国都罪
止定給弖。犯過人尓。種〜乃令祓物出天。祓清止定給支。と
め有已。上件天罪八種の。須佐之男神ゑ始まゑし事て。既
ゑ第四十二段ゑ出さり。まゑ国津罪どもの言。義
は。記傳三十九卷はゑ大祓詞
後釈ゑ見えさり。披見るゑし。ちて師説ゑ。凡て都美ハ。都
都美の切はゆ名ゑ言ゑて。古語ゑ。都〜美那久。まゑ都〜
麻波受。ゑど云へる都〜美と一ゑて。諸の凶事ゑ云ふ。都〜は。
都〜志牟を一ゑ。ゑる。ゑ〜ゑむて。凶事あらじ。有せじを
ゑる方ゑ云ひ。ゑ〜ゑむて。凶事を露さじと隱ゑ方ゑ云ひ。
ゑ〜みれく。ゑどは。凶事ゑきゑ云。ゑまらず。其は必しも。惡
末て各異ゑるゑ如くゑまぜ。本て一ゑ已。
行のみ。ゑ云ゑ非ゑ。穢まゑ禍ゑど。心を爲るゑて非て。自
然ゑゑる事ゑても。凡て厭ひ惡むゑき凶事をバ。皆都美

を云ふ。然るを世人、罪字より泥みて、唯悪行なのみ云と心得て、都美てふ言の本義を辨ずに故に、祓罪條の中に、心得ゝ祓て、解を誤まるゞ多ゝ有て、惡行は一ツに就て、當さるものゝ、都美と云ふ總て、名ゞ惡行は一ツに就て、當さるもの、ハ當らざる事多し、也免此字は勿泥みそ、物語の意より、人の容兒のヒろ犯處あきを、罪あしを云、るに書あどより、人の容兒のヒろ犯處あきを、罪あしを云、るに、是ら中昔まで古意の殘れるあヒ、然るを前世より、と多し、是ら中昔まで古意の殘れるあヒ、然るを前世より、惡行の罪あき故に、容兒美く生まとあ意れヒ、扨ど解あ、せるも、いみじく強説あヒ、はと災より遇ふあどなる罪とせ、あをも、己ゞ外あとる罪ての報より、災にあ有あヒを云、も、同じ強説あり、みあ罪字より泥免るゝらの誤ぞのし、類をは、大祓詞ゞをよ。舉とあ條ゝ比みふ局らゞ餘ふもゝ有多かるを、包云言ふて、彼詞に。許ゝ太久乃罪出武。とあふより同じ。彼文も、舉とる外より、畧々る罪條あゝ多犯由にて、かく云、るあめ。○種ゝ求は。師云。国中ゝ人等の。天津罪国津罪ゝ種ゝ比中。何をよまれ。犯しなふ事あふを。探ヒ求むる歟云ふ。穢災あども、其事のあるゞ犯しとるあり。かくて大祓詞あどふ。許ゝ太久乃罪出武を有ふた。然探求むるはゝふ。犯ふと

る罪ぞもゝ比。種ゝ許多ふ。顯れ出るを云、ゝ。古、人ゝ心直の比しゝバ、身より犯ある者ハ、大祓より、大方隱さゞ顯ゝふ申せふあヒ、顯ふ白せゞ、其罪祓に除こり清まり、顯さぢまゞ清はらざれバあり。○因ふ云、犯の假字、種ゝ論ありて、一定せぢヒふ。新撰字鏡の全本より、憎也、平加志云とあるふ據れ。

○取国之大奴佐は。師云。国ゝ。国之大祓を。ふ。国と同くて。諸国を云ふ。乃国中と云、こと。ゝ比。大とは。大祓ゝ比大を同く。廣く国中をヒ取る故より云、り。奴佐ゝ。神ふ手向る物をも云ひ。万葉、哥より奴佐ゝ。神ふ手向る祓ふ出ゝ物をも云ふ。名義は。禱布佐ふて。事を乞禱ぐと

て出に布佐の由あり。泥疑布を切むれば、奴とある、祓の奴佐も、其罪穢を除清め給へと、禱ぐ意を以て出にれば、神より献りて禱ぐと、意を同一つあり。いちて布佐は麻れり。古語拾遺に、好麻所生故謂總国。古語麻謂之總也。今爲上總下總二国とあり。麻を布佐と云ふこと、此佗よりて見えたれども、總国を云ふ名を思ふに、信より然ぞ有りけむ。抑神より手向はめ。祓より出にも、其物て種々ある中に、殊に麻をしも名に負はて。有るゞ中に、主とには一種より就てあり。即麻と書くも此故ぞかし。下は引る神祇令にも、戸別より出に物て、麻一種あるを以てを、主と有るに知らし。内宮儀式帳に、三祭十六日西川原、祓れ儀を記せは所に、各奴佐麻令持而先宮東方皆悉令向侍而人別之庸。並後家穢雑事令申明然於御巫内人各

所持之奴佐麻一條分授。即御巫内人管集取持其人別所申穢事細令傳申明云ことあるも麻あり。奴佐麻と、奴佐より出に麻あり。奴佐と麻をニツ、ハ非ず。いちて此れ奴佐て。大祓より出に祓物あり。祓物の事は。千座置戸の下に云はゞ如し。考見て。古れ大奴佐れ意を知らし。○おれ師説第五十九段の傳より出せり。然るに今京れとに祓てて。大祓に。大奴佐を云物。名れみ存て。古れを は其趣大く變て。本意を込と。貞規儀式大祓條に、神祇官頒切麻云く、祓異行大麻とあり。行大麻と云、何よれるに、うれ祓行大麻とあり。大麻と切麻より對て。大れる由の名あり。まと江次第同條に、次行大麻、を、あり。細書に、神祇官人以下執之上卿辨大夫諸司料各異西宮抄曰上卿料祐曳と有り。まと古今集哥に、大麻の引手あまとよりぬれず、云云と詠るハ、江次第に、座前引之とあるとは別事にて、公

の大祓れ大麻と云名をかぶて私の祓よりも大麻と云る
う大てふおを當らぶまと神事よ榊枝了麻と紙を垂
とるをも奴佐と云ふ紙も木綿の代おぶまと神社をめ
授くるを御祓大麻と云物は木綿麻を串よ挟みる形
了て此も紙を代りよ用もるあり其も中古よ大奴佐
と云ひおも中昔よりおあとのをハそれ趣れ異おるも
ぞれ。ちて取をは。神祇令ふ。凡諸国須大祓者。毎郡出刀一口。
皮一張。鍬一口。及雑物等。戸別麻一條。其国造出馬一疋。を
ある如く郷〻戸〻をぶ。祓物を出ちし免取を云ふ。如此
おて。其国中れ人民の身〻れ罪穢を祓ひ清むふれぶ。天武
天皇紀ふ。五年八月詔曰。四方爲大解除。用物則国別国造
輸祓柱馬一疋。布一常。以外郡司。各刀一口。鹿皮一張。鑊一
口。刀子一口。鎌一口。矢一具。稲一束。且毎戸麻一條。ま十
年七月。令天下悉大解除。當此時。国造等。各出祓柱奴婢一十
口。而解除おど見えと。然ふよ今京れどよ至ぶては。例の大祓ふ。戸

別人別おぶ。祓物を出れおは無めおと見えて。貞観儀
式。延喜式れどふも。其事ち見えぶ。儀式ふ。神祇官陳祓物。
於朱雀門前路南。分置六處。但馬在其南。方北向をあれど
も。此はあぶ神祇官ち設置れみふぶ。四時祭式。六月十二月晦日大祓條
ふ。挙られる種〻物。これらの六處ふ分置く祓物おる
ぶし。はと別ふ。大麻切麻と云物あれども。古のちまよ異
おり。其ち上よ云るが如し。但し神官れ。神事ふ犯ある人りは。臨時ふ
祓を科せて。物を出ちしむる事は。中昔はて其法あぶれ。
其は延暦二十年五月。太政官符ふ。定准犯科祓事。一。大祓
料物二十八種。馬一疋。太刀二口。弓二張。矢二具。刀子六枚云〻。右闕怠大嘗祭事。
及同祭齋月。一本ふ日ふ作る。内弔喪問病判署刑殺文書決罰食

宍預穢惡之事者。宜科大祓所輸雜（一本は雜字なし）物。具如前件。
官人有犯兼解見任。一。上祓料物二十六種。（太刀一口。弓一張。矢一具。刀子二枚云々）右闕怠新嘗祭。鎮魂祭。神嘗祭。祈年祭。月次祭。神衣祭。
等事。毆伊勢大神宮禰宜内人及穢御膳物。並新嘗等諸祭
齋日。犯弔喪問疾等六色禁忌者。宜科上祓輸物如右。一。中
祓料物二十二種。（刀子一枚云々）右闕怠大忌祭。風神祭。鎮花祭。三
枝祭。鎮火祭。相嘗祭。道饗祭。平野祭。園韓神。春日等祭事。毆
物忌。戸座。御火炬。奸物忌女及觸穢惡事。預御膳所。並忌火
等齋日。毆祝禰宜及預祭（一本。預祭の間に齋字あり）事。神戸人犯弔喪
問疾等六色禁忌者。宜科中祓輸物如右。一。下祓料物二十
二種。（刀子一枚云々）右闕怠雜祭祀事及齋日。毆祝禰宜。並預祭神
戸人犯諸禁忌者。宜科下祓輸物如右。以前被右大臣宣偏。
承前神事有犯科祓贖罪善惡二祓重科一人。條例已繁。輸
物亦多。事傷苛細。深損黎元。仍今弛（源義直卿の古本。まさに前田夏蔭本ともよ。改作る。）張立例如件。其毆傷若重者。祓淨之外。依法科罪。齋外
鬬打者。依律科決。不在祓限。又祝禰宜等與人鬬打。及有他
犯事。須科決者。先解其任。即決罰。神戸百姓。有犯失者。行齋
之外。決罪如法。今具奏狀。奏聞。奉勅。依請。と類聚三代格よ
見えたり。右の内。大祓とあるは。大上中下と定めらるる。祓は品ふくして。囹之大祓の謂なれ非ず。思
ひ混ふべからず。齋宮式よも。凡雜色人以上。與人毆鬬者。
科上祓。凡察官諸司及宮中男女。修佛事。和奸密婚者。科中

祓あど見え。三代實錄十一に。内膳典膳雀部朝臣祖道隱匿。司中人死之穢。仍科上。祓。これハ神事にて非ざるども。穢事の罪ある故に。祓を科せるあり日本紀畧に。寛弘七年九月廿五日庚子。大原野社辺有葬送輩。仍預等。大祓了。あど云事見も。○玄道云壬生氏古文書に。應永十六年十二月十日。神祇官解を載て。坐伊勢國太神宮二禰宜。豊受宮一禰宜云く。尾張神戸等。依過穢神事。崇給。遣使科上。祓可令祓清奉仕。事まさ坐山城國木島神云く。坐攝津中。祓可令祓清奉國住吉神。社司依過穢神事。崇給。遣使科上。祓可令祓清奉仕事を見も。此頃より云ら。あわ古風の遺まるあやゝ。深く感れらはゝふあむ。

○爲國之大祓而て。貞觀儀式。大嘗祭儀に。八月上旬に。定大祓。使發遣。左右京一人。五畿内一人。七道各一人。下旬別に。更復發遣。左右京一人。五畿内一人。近江伊賀伊勢一人。大嘗祭式に。凡大祓使者。八月上旬に。定差遣。左右京一人。五畿内一人。七道各一人。下旬更に。定祓使差遣。左右京一人。五畿内一人。近江伊勢二箇國一人。在京諸司。晦日集祓如二季儀。

ぞ有るに據れば。此は神代に初めて。大嘗祭を行れし時に。大祓有れば例を。後まで傳來まる御政ある事疑ふ。其は左右京五畿七道と有るは。國中悉の大祓ぶるこを。炳焉あきらかあれば。○玄道云。角田氏說に。此大御代ハ。天下を尽に總知食ゝ事ハ。國巡ゝ坐る古傳ぞもよて。いと明白のるを。此御禊て。何國にて行てせ賜ひけむ考ふべき由なきを。いと惜らしと論るは實に然說あるに就て。熟案ふに。應神天皇御世に。越前國に御禊に行幸せる故事。さてハ中世よも難波の祓。また禍事を西海に祓棄ちふ事を。凡人も後世までいひ傳。あるハ。おぞろげの故なら。後御世ハ。便をきに付て。川辺にて行ひ給ふを。上代に。天神御祖命の御例のに。大海にてせさせ給ひれむ。殊に此。大御代及出雲。大神の神代にハ。大祀て更あれば。大事とある時ハ。必安立花。小門に行幸して。行賜ひふにやをさ察奉れるやい。のゞあらむ。尚をく考ふばし。

古事記仲哀天皇段。國之大祓とある

所の師説ゐ。国を云ひ大と云義ハ。国中悉く祓あゐ由ゐ
ゑ。毎年の朱雀門前に大祓あゐも。国中より也非
れども。百官悉くに令を以て。大祓を云ふ。天武天皇
紀ゐ。五年八月詔曰。四方為大解除用物。則国別云ゝ。はゝと
七年。是春将祠天神地祇。而天下悉祓禊之。はゝと十年七月。
令天下悉大解除云ゝ。はゝと朱鳥元年七月。詔諸国大解除。
まゝと文武天皇紀ゐ。二年十一月。遣使諸国大祓。まゝと大寶
二年十二月壬戌。廢大祓。但東西文部解除。如常。はゝと慶雲
四年正月。因諸国疫。遣使大祓。文徳天皇紀ゐ。嘉祥三年四
月辛亥。為除凶服。先遣大中臣氏人於五畿内七道。諸国以
修大祓。癸丑帝吉服大祓於朱雀門前。清和天皇紀ゐ。貞観

七年七月廿九日戊申晦。先是武徳殿前有人死。仍大祓於
建禮門前。以攘邪氣也。仍ゑ見えゝゑ。小右記ゐ。天元五年四月廿一日。作物所
板敷下有犬死云ゝ。廿三日有大祓。事賀茂祭間内裏有穢
之時。先例被行大祓云。岡部翁の祝詞考云。大祓事神代よ
り傳れゑて。櫂原宮ゐ初国ゐらし。御代ゐも漏れて。絶ゑ行ひ
賜ひれむゑ。上代の記ゐ。古事記の外ゐも漏れて。後ゐ天
武天皇紀ゐ見えゝゑ。持統天皇紀ゐ。安ばて見えぬハ。漏
とるゐらむ。文武天皇。御代始の紀ゐは。臨時大祓見也。大
宝元年ゐ至て。六月十二月晦日れ事。令條ゐ挙られゝゑり。此二度の大祓も
かく定例とゐめぬるを思ふ。早とり。此二度の大祓も
有ゐ。ゐるゐ。然れど天武天皇。御世ゐ二度。七月れ初ゐ有ゐ。ゐ
るゐと。文武天皇の御代始ゐも。六月十二月晦日れ事の見
えぬゑを思ふ。此ハ大宝元年の御定とぞ安べき。其後
の紀ゐハ。定例ゐる故ゐ。暑きて記されぬゐり。大宝二年
十二月晦ゐハ。廢らもゐれ。是月太上天皇崩坐し故ゐ
非ばきバ。諒闇の中ゐ文部ゐ解除はゐから国の流ゐて。皇朝の神事ゐ
ゐぬらも有し。抑諸国れ大祓の儀れ。記せゐ物無れ

れぞも。朝廷ゐて行たゐゝ式ゐて。准ず知ばし。神祇令ゐ。
凡六月十二月晦日大祓。謂祓者解除不祥也。東西文部。東漢文直。西漢文首。上祓刀讀祓詞。文部漢音所讀者也。訖百官男女。聚集祓所。中臣宣祓詞。
卜部爲解除。文部がをむ祓詞も式の大祓詞の末ゐ載られ時をゆ傳來まる文とを聞えば後ゐ漢國或を百濟ゐど
の巫祝れ唱ふゐ詞ゐ依ゐて作れるれらむ元をり皇朝
ゐを由ゐき事ゐゐ。ゐとゐト部爲解除も上
代の事ゐ非ず只令の頃れ定免ゐゐばし。元正天皇紀ゐ。
養老五年七月。始令文武百官率妻女姉妹。會於六月十二
月晦大祓之處。令ゐ百官男女とある女を女の官人ゐり。
女姉妹のことを云ざるを。百官男女と云ふ内ゐ込ゐゐ
ゐゐとゐ思ふ。令の百官と云文を養老五年の時ゐ改免
らまゐるゐて。是も妻女姉妹
をこ免て云るゐめ有ゐし。太政官式ゐ。凡六月十二月
晦日於宮城南路大祓。大臣以下五位以上就朱雀門。辨史
各一人。率中務式部兵部等省。申見參人數。百官男女。悉會
祓之。臨時大祓亦同事。見儀式。ゐど見ゆ。まと臨時祭式ゐ。六月晦日大祓十二月准此云ゝ。右晦日申時以前親王以下百官會集朱雀門。ト部讀祝詞事。見儀式とある非ことあり。祓詞を中臣ゐそ讀ことあれ。式文ゐかの誤ゐを有べくも非ず。事見儀式をゐる。其儀式ゐを
下ゐ引出る如く。中臣
讀祝詞とある物をや。ちて其貞觀儀式ゐ其日午四尅。神
祇宮內縫殿等。官省寮。候延政門外。百官會集祓處。先此神
祇官陳祓物於朱雀門前路南。分置六處。但馬在其南方北向。所司設座於
朱雀門。並東西仗舍。大臣以下五位以上云ゝ。立定神祇官
頒切麻。云ゝ。訖中臣趍就座。讀祝詞。稱聞食。刀禰皆稱唯。祓

畢行大麻次撤五位以上切麻既而散去とあり。王臣百官を總て云あり。此中に頒切麻まと行大麻おとは上抑祓代より有りし儀々何とのや後の事なきて所思也。抑祓は其人々より祓物を出ちたむる態なほよ。後ふは延喜式おぞふも。然る事は見えず。二季は大祓の料物は舉られ名まど。其は多く司より設置こをふて。百官人は身より。各々物を出せし事ハ聞えず。式部省式よも多く其日所司陳列祓物とはみ見え。祓馬も多く馬寮より出せり。凡て祓のはま。令の時なら。既ふ文部の漢文の詞を讀こをと。部は解除なほ事など。古へ有ざりし儀どもは雜りおまぢ。況て其後世々ふ轉變りぬるおを推量るぼし。かく

て中昔より以來は。大のと祓は陰陽家の職はことあり。江次第などよ。六月十二月晦日ふも。禁中は儀陰陽家の様々は和ざあり。況て私の祓は。なべて陰陽師はせさるる事とれまり。伊勢物語よ。陰陽師かむおぎ召て恋せざと云。祓の具しておむ行々る。云々。恋せじと御手洗川ふせしみそぎ云々れど云を見ても知べ。はて小右記よ。天元五年六月晦日。今日大祓。所公卿一人不參。仍以右少辨惟成爲上代被行之。内侍等稱障不向祓所。仍以女史爲内侍代とある天元は。圓融院天皇の御世あり。おまを見れば。當時なでよ。大祓のいとく衰ずとしわど知ら。遂て甚悲しかくて參らぬを。咎免給ひは事も聞えぬ。總て神事のおわはりふ成れりし故あるべし。穴うはあれうしこはて二季大祓の儀。西宮記。北山抄。江次第ぬど。考合なほよ。貞觀儀式と大方は同れども。易まる事共も見えとりぱと百官は大祓も。二季は晦日のみれらず。臨時ふも有しおを。おを。大嘗祭式ふ。凡大祓使者云々を。

諸国の使を遣に事をのげて。次ゐ。在京諸司晦日集祓。如二季儀と見え。齋宮式ゐ。内親王ト定ありて後ゐ。擇日時百官爲大祓同尋常二季儀をのゐ。其外神事れをゐ。内裡ゐ穢事のゐて。大祓を行れし事れども。古記ゐ見ゆと有ゐ。○上件の師説も記傳ゐると。大祓詞後釈れ説とを取り合せて出せゐゐ。○荒世和世之御服贖物とは。江家次第ゐ。大祓儀れ次ゐ。六月晦日十二月准之縫殿寮奉荒世和世御服事。神祇官奉荒世和世御贖事。謂之節折とある御政ゐて。貞觀儀式を始め諸書ゐ出さゐゐ。此を天皇御自身れ祓物を出ち賜ふ御儀ゐして。大祓を行れゐゐ。當日ゐ。必是事のゐ元をゐ天宮事ゐる。邇く藝命

れ大御代をゆ。然有しを決けまば。其儀式ゐ據りて此文を作せゐ。但し此御儀を諸書ゐ。或れ大祓儀の次ゐ举げ。或れ大祓の前ゐも举さり。其前後ハ詳ゐら祓ど。大祓れ其詞ゐ。タ日之降と見え。節折の儀文ゐは。當日晩景とあり。然れバ大のと同時ゐるゲ。大祓ハ少ゥ前ゐも在ばし。然るゐ其儀文れ精く。かゐ古ゐれ貞觀儀式ゐれを。其は進退壯嚴ゐどの精ゐれて。要ゐゐ故實ハ。後の書等をゐれ却りて麁し。然れども。其古ゐを捨て。後をれみ舉ばくも非ゐば。儀式をはゐ本ゐ立てく。後れ諸書を參攷ふゐを左れ如し。但ゐ其儀文ゐ。東西文部ゲ横刀伐奉りて。祝文を奏ルこと。まと其傳奏の有趣れ嚴重きれども。後ゐること。著れ。文の接きゐ去ゐ。全文を引さり。其れ故を溫ゐて。其後れ沿革を知り。まと後の儀をゐ。及ぼして。古の趣をも推知ばき便りとも。ゐれバゐり。抑其儀式ゐ。二

季晦日御贖儀。神祇官預前受備其料物。鋏偶人卅六枚。金銀装各十六枚。無飾四枚。木偶人卅四枚。御輿形四具。挾幣帛木卅四枚。

金装横刀二口。云々。此約とる文は。凡諸種々の物の色目水瓮。坩坏各二口。匏二柄。小竹卅株と有るハ。御贖より用ふ。延喜式も同色目なるゲ。鐵人形二枚とありて。木偶人。御輿形。挾幣帛木。をいふ三品は。凡し。其日卜部各著明衣。其一人執御麻。二人執荒世。二人執和世。二人執壺。宮主史生神部等。左右分頭前行。中臣官人次之。御麻次之。東西文部次之。各執横刀。荒世次之。和世次之。竝著木綿鬘。御麻は。即木綿麻を著と。榊あり。荒世和世は。色目の所より。小竹卅株。徑各二分。長八尺とある者あり。壺とは。色目の所より。水瓮。坩坏各二口。を云。物より。水瓮より水を入れて。其色目の所ある匏は。決て此り添あるべし。坩坏は。鋏偶人。木偶人。御輿形など。の納とると通も。其は下より引く。宮主口傳抄りて知べし。横刀とは。色目の所より。金装横刀二口。とある是あり。此は西宮記。江次第あぞふ。木工造之。とあり。然るば木劔りあそ。宮内輔陳列御麻等。候延政門外。大舎人叩門。闈司問。阿誰。大舎人答云。宮内省輔姓名。御麻奉登御門。候闈司傳奏如常。輔入就版奏云。宮内省申久。御麻進止。神祇官姓名。御門候止申。退出召中臣。殿の宮は南内りて。行たる〜儀ある故ふ。宮内省ゐまより預まり。故是問答。まと奏詞を。弘仁延喜の式共り。宮内省式より出されとり。下ある奏詞も同じ。今世より佗の門より至りて。物まう。と云へば内をり。ゐうれ。と應ふを。薩人ハゐあまと云ふ今の文り。問。阿誰と有るは。古も云ふこそ。○玄道云平家物語ある。有王ゲ嶋下りの條より。嶋の者より行むゥおるて。物申さうといへバ。何事とあとふ。とあり。まと明人の全淅兵制ある日本風土記より。親友至訪。侍立門外。呼云。木那麼乃人在否之言。内云。獨里乃云。是誰之答。と云。考合ゐばきあり。中臣稱唯。一本。中臣の字あし。

率文部四国卜部。宮主在此中。入候於宜陽殿南頭。称唯。四国卜部宮主ゐど

の事ゝ既ゝ第六十段ゝ傳ゝ云ひき。掃部寮。頒敷簀席於階下。縫殿寮。置荒

世和世御服於席上。荒世和世ゝ上の卜部ゞ執れる荒世和世ゝ別ゝて御服ゐる故ゐ

縫殿寮ゝれゝ頒ゝり。本書ゝ式も此文錯乱して否ぬゐ所の小字ゐ記せ。今ゝれを訂せり。江次第ゝ内裡式文。

雖載南殿儀。近代於御在所行之。と。藏人式云と。其御

在所ゝ裝束を委く記し。ゐ故ゐ清涼御記云と。當日晩景。

所司裝束於御殿時刻出御。先是節折藏人縫殿司齋主宮

主東西文人等祇候と見え。西宮記も同文ゐり。ま。滋野

井公麗卿の公事根元階梯ゝ。ゐ。ゐ年中行事と引給へ

るゝは晩日夜神祇官供荒世和世御贖事東庇北第三間

御裝束畢節折藏人著座次祭主宮主東西文人著座次出

御御直衣自此以前供御手水と見え宮主口傳抄も大抵

同じ裝束ゝて御出之間皆悉消御燈是故案也但南方之

御燈一不消之とあり公事根元ゝも燈を高燈臺ゐ也も

ゐて出御の程ゝ消と。南の方をバのこゝと記されて

とり。○玄道云雲図抄ゝ此を挙又差図ありて右御出云

云と。今説ゝ出せ。まゝ上下ゝ内裏式と引れたる

を今傳ゝる本ゝハ見えゞ。そは次巻ゝ云ゐ。

縫殿寮先以荒世和世御服率女嬬参入。即内侍縫司。掌縫以上供之傳

取令藏人供奉。訖縫殿寮退出。荒世賜卜部。和世賜宮主。西宮

記ゝ縫殿官人。舁豆。志余呂比御服附女官女官授中臣

女中臣女供天皇著給氣息返賜と見え。江次第も同文ゝ

て其旁書ゝ内裡式云縫殿司女官令内侍供之者今中臣

女供之とあり。彼階梯ゝ引ゝし年中行事ゝた縫殿寮官

人舁荒世和世御服参入置於簀上女官傳取授於中臣女

供之謂節折也天皇加氣息返給とゝ。ゐ。ゐ此一件

本朝月令ゝ引ゝる弘仁神式及び延喜式ゝハ載し漏さ

れゝ。宮主口傳抄ゝも。この件ゐくて先宮主進鏡鈴御

沓御櫛居柳筥一度進之傳之女官女官傳之命婦と云次

ゐる件あり。建武年中行事公事根元もゐれゐ同じ。

中臣捧御麻進就版勅曰。參來。稱唯就階下。中臣女。簡氏女堪事者

奏定。於殿上轉取供奉。訖授中臣。還本處。即授卜部一人。令向

祓所。弘仁延喜の式共に同じ。西宮記に、中臣奉御麻付中臣、女供之天皇自取摩御躰返給とあり。江次第かの年中行事、宮主口傳抄に、此事あり。然るに、建武年中行事、公事根元などに見えず。宮内一本に、宮内の二字なし。輔更入奏曰。宮内省申久。御贖物進止。神祇官姓名。大和河内乃文部。四国乃卜部等率天候止申。退出喚中臣。稱唯。東文部捧横刀入就版。勅曰。參來。稱唯。就階下。轉授中臣、女。取奉御畢退出。次西文部進退如前儀。弘仁延喜の式共に同じ。西宮記に、は、東西文人一く進劔付中臣、女。天皇著給御氣返給とあり。巳江次第かの年中行事も同じ。宮主口傳抄文保二年六月晦日の儀を出せるに、御麻を進れる下に、次宮主取祓刀傳女官。女官傳命婦とあり。其終の文に、今度以外被興行畢。但縫殿寮役荒妙和妙御服等无之。東西文人不被催出之。遺恨是也と見え。公事根元に、此事のおきを按ずるに、其後遂に止さるか。次中臣率宮主卜部執荒世者就階下置於席上。宮主執荒世授中臣。中臣一本に中臣の二字なし。取授中臣、女。即執荒世者就階下置於席上。卜部披神式。次中臣率卜部執荒世者就階下置於席上。卜部披神祇官及荒世卜部進置竹夜於庭中席上。中臣官人卜部等解畢授中臣、女。女取供之。天皇起給與女量御躰五度。先量身長。次量自兩肩至御足。次左右手自胸中至指末。次量左右膝至足。凡竹九枝。中臣、女毎度承取示神祇官と見也。西宮記も同文なり。然れども下に引出る。宮主口傳の文を合せ考ふべし。宮主取坩授中臣。中臣轉授中臣、女。執奉御訖退授中臣。轉授宮主。宮主取祝訖授後取卜部。荒世事畢退出。次中臣引和世進退如荒世儀。其荒世者賜卜部。和世者賜宮主。訖皆退出解除河上。とあり。是なり。弘仁延喜の式共に

同じ趣なり。江次第に。次卜部捧壺授中臣。官人付中臣。女供之。天皇放口氣於壺内三度。訖中臣女傳神祇官。神祇官授宮主。宮主祝畢。次和世參入。如荒世儀。事畢相率退出と見え。西宮記も同文にて。密祝了とあり。彼年中行事にハ。次卜部捧壺授中臣。官人付中臣。女件壺中入鐵人形二枚。黄皮人形二枚。以紙裹其上結其上。天皇放口氣於壺中三度了。中臣女返授中臣。中臣授宮主。宮主密祝申。次進和世。如荒世儀。事訖相率退出。臨河解除と見え。壺中の二品宮主口傳抄の。文保二年六月の儀を出せるも。此に同じ。抑これ儀式その小注に校ぬる如く。互に漏さる事は。差ある事も多かれど。中に。縫司は御服を進ること。神祇官は大麻を奉ること。中臣の竹夜を進ること。卜部の御坩を奉ること。此四條を疑なく天津宮事なれば。かくて此御政なれども。節折と稱ふ由は。宮主口傳抄に。謂之節折者。以篠量五體四肢也。と記して。下文に。次友人部。居住西京云々。進篠等先一筋獻之。宮主取傳女官。女官取傳命婦。命婦進主上。主上量御身長。返給命婦。命婦授女官。女官傳宮主。宮主折懸之。官人參入之時者。中臣可折懸也。〇公事根元階梯に引ける。年中行事にて。神祇官及荒世宮主等。進置竹夜於庭中。贊上。中臣官人卜部解之。先以竹一筋授中臣女。中臣女取之。參入。天皇起立。與中臣女量給御躰。自御頂至御足量之。取其程授中臣とあり。さて口傳抄なる友人部といふは。なほ外に未見あたらず。〇玄道云。角田氏云。或書に。友人部の友ハ。身の六の誤りにて。六人部ハ身取部にて。姓氏錄山城國神別に。六人部連。火明命之後也とある六人部なるべし。枕艸子に。鞆岡ハ篠はおひたるがをかし。神樂採物哥に。舍人等が腰にさがれる。鞆岡のさゝ。なども見ゆ。鞆岡ハ西京の地名なれば。六人部氏此所に住て。此岡の篠竹を献るなるべしと。鈴木重胤云へり。御躰の御長をはかる竹を多献るゆゑ。身取部氏をいふなるべしと説るは。まことに然るべしと云へり。次又獻二一筋。自兩肩至御足合

量之。宮主折之。次又二筋獻之。量左右御手。自胸中至指末。返給之。同折之。次又二筋獻之。量自左右腰至御足。同折之。次又二筋獻之。量左右御膝至御足。宮主折懸之。如先度也。

己上五度量御躰云々。かの年中行事も同樣なりて。宮主折棄其餘ゝをのゝ節折は名義あれなりて著明あり。公事根元よも。ト部。竹のゝを。庭中の席は上ゝおく。節折の命婦。竹をもて參めて。御長をめはじ先て。所くは寸法をもめ果て。宮主ふきりのてがたせて。御はら冬を勤むるあり。荒世和世とて二度あり。二度はゝ祿を給ふ。節折をば。ゝ殘りをいふ。竹ふて御名けの寸法をとり。其程よ折あてゞ冬ぞれり。とあり。但し和名抄竹具ふ。野王按節。和名布之。竹中隔而不通者也。兩節間云笠。笠竹之與。兩節間俗云與。故以舉之とのり。世の板本よ脫文あり。今は一古本ふ據れり。然まだ。節は布之ふて。與ふは非ず。節と節をは間を笠と云ふふ。古ゝをり通はして。節をも與を云ひし故ふ。節折をは書來れり。其は古今集歌ふ。木よもからず。草よもあらぬ竹のゝれはしふ我ゞ身ハふりぬ。ばれり。を詠る竹のゝ。は節を云ひは。を云ふゞ。笠は事ふ。以ても知ばし。

和名抄ふ。兩節間を與と云を。俗とふとれど。節を布之。笠を余をいふゞ。宗は古言ふまば。節を與と云。なこそ。却ゆて俗とも云ゞれ。其は古事記ふる志毘臣の哥ふ。夜布士麻理と有るは。八節結と云こと。夫木集ふ。陸奥のをふは菅薦七ゆふ。君を寢ふめて三ゆふ吾寢む。と云る。十ふ七ゆ三ふの布は。共る節を云るて知ゞし。然て此哥詞等ふゝまバ。布志の本語は。布の一言ふぞ有る。ちて此を二度供奉とて。荒世和世を稱ふ由を。本朝月令。年中行事祕抄れどふ。神功皇

后紀に。神有誨曰。和魂服玉身而守壽命荒魂爲先鋒而導師船。卽得神教而拜禮之。と有るを引まて。荒魂和魂の贖物のおと記し。諸書にも多く此に從さ巳。荒和と別さる意ハ。然も有べれど。世は決めて。竹節に御世を係るな壽言なるべし。

其は世を余と云は。疑なく笠多余と云ふと同言にて。其本末ハ知ねども。人の世を經るヿを巳〳〵宜からぬ事あるを憂節と云方バ然る節くゞな通りて。世を平穏に經給ふべく。其を節竹に付て贖物に出し給ふ御儀なるべく所思まむれ巳。○校者等云古史本辭經には。お日の没りて。闇となる找。余と云は寄てふ言なり。其は神世の歌に。青山に日が隱らバぬば玉の夜は出れむと詠める歌の如く。日往ろば夜の來り夜往けバ日の來巳て隔きなし。晝は起居て事を爲去找夜は寄居て息へむれ巳故。古毛今も貴人なとの寢ね給にを御余流といひ起ま給ふな。御比流と是云牙り其は中務内侍日記に。御ゑは゜の後もとみヿは祢らまぼ同じ日記に。御ぴる゜ゑり前に參めあまバ云く。増鏡に。けふ此日かげに御門ゑいおくよ御ゑ゜る゜と問ふ。著聞集五に月找も御覧ぜで。れ゜ゑ゜る゜なれゑれど多く見えさり今ゑ御ひ゜る゜をおひなりおひれべれひなまたひならむと活かし御ゑ゜る゜をにゑ巳れゑべおゑれおゑらむと云ふ此え夜と寄とえ元ゑり同言なるが故な巳扨はさ世代など找余と云ふも夜と同語にて寄ㄋり其と万葉二巻に天地之依相之極所知行神之命等云く。六巻ヿ天地乃依會限萬世丹栄將往迹云くと詠る如く。天と地と寄相ふ極み人はさ物の寄て在るが故な謂ふ言れ巳。但し世代此字義をも別ちて云牙ゑ世找余と云ゑ。歳な余と訓みに同じく暑往ㄋば寒來さり。寒往けバ暑來巳却ゝ年重れる找云ひ代を余と云ふゑ。甲退ㄋば乙代り丙退けむ丁代る如きを謂ふ。此ゑ共ヿ書夜の替ゑふ相似なる故に余と云ふ。然ゑハ常夜常世れ文字こそ異ま全同語れゐなも思ふべし。とあり。

ちて是時。縫司れ供奉る御服をめ。荒世和世と云ふまでは。上の荒世和世といふ名をばさ御服の名にも負せたれ巳。然るに此を

西宮記ふ。豆〻志余呂比、御服と云ひ。江次第ふ。豆〻志呂比、御服と有ふた。何ある事ふゝ。執政所抄ふる。宮咩尊祭文云。御飯御酒。綿布。津〻志余呂比仁とあり。此を拾芥抄ある。宮咩祭文ふは。絹乍編綿乍結をたのゝ。然れど數あふ物を。一ッふ編ゝ結ゝ取總るを。都〻志呂布をも。都〻志余呂布とも。云語の有しふは非ざふゝ。後人能く探ぬぶし。其た縫殿式ふ。六月晦日御贖服。皂帛幞頭二條。二餘綿北屯。曝布。袍二領。帛紐十二條。袴二腰。帶二條。曝布。被二分。櫛二枚。履二兩とありて。此を總て。葉薦ふ裹み。机ふおなて。進る趣ある多も思ひ合せてかくた云ふあり。○玄道云。万葉集五卷の長哥ふ。堅塩乎取都豆之呂比とある略解ふ。かさまりとる塩を。食ゝき〳〵おて酒のむ也。源氏物語帚木ふ。つゞおり歌ふと云ふも。一口ゝきり

きゆふ歌ふを云、りとあり。さてハ連綿まと綴あど。全心ぢ有の語と聞え。又節折の折ちふ言も。乎知といふを似通ふふや。を思はゝ考へも有れば。天皇の御代を。千万世と永く。をち返り坐ばべく連〻ちろひ白せる。神語の有、ふおふハ非ふゝと。件師説ふ因て思ふゝ。餘りのさくおりや。但し此考ハ何もあれ。荒世和世と云ふ。小竹と御服を其別あり。小竹は本れり。御服た末ふ。由多辨ぶ。後世の書等ふ。一種のおを説ふふは。最も麁濶ふふ事ふり。そは儀式ふ。荒世和世、御喜式ふ。荒服和服と書まを。旁ふ。アラタヘノミソ。ニゴタヘノミソを訓ふ。古訓ふ非ず。アラヨノミソ。ニコヨノミソ。を訓ふし。まと公事根元階梯ふ引れし。年中行事ふ。荒世和世、御服の原注ふ。謂節折、也と有まを。此た節折ふた非ず。まと按荒世、荒妙布、御服也。和世、和妙絹、御服也。以已上、称豆〻志余呂比、也。とあれを。其名こそ相似とれ。荒妙和妙ふた関らぬ事ふり。其た上ふ引く縫殿式の色目ふ。荒妙和妙の名れきを以て知るべし。ちて宮

主取坩云〻と有ふた。和名抄ふ。楊氏漢語抄云。坩壺也。和名都保。をある器れ也。此坩ふは。鐵人形二枚と。黄皮人形をを入とるを。卜部二人の執持ち參來て。天皇ふ奉れば。天皇やゞて御口氣を壺中ふ。三度伊吹入させ賜ふ事。上ふ引る記文よて明あるを。東文部の横刀を採て云〻をるふどあそ早く故大人等の如くいと後世の漢ざまれ方あ也。既く說ふ如く。御服を進也。大麻はと竹夜御坩ふをを奉るを。必ず大祓ふ隷とるわざふて。此を御贖物と申て。そをやゞて天津宮事ふふ事。疑ふぢくもあらをふむ。玄道云。人形を贖物をして上るふとハ。釈紀ふる先師說ふ。人形者所謂素戔嗚尊之濫觴也。號贖物是也。と有るを察て。古傳ふる事明白の也。はと年中行事祕抄ふ引ふ舊記

ふ弘仁五年六月。依聖躰不豫。仝月七日己丑。行御贖祭。其後毎年六月十二月。從一日至八ヶ日。御巫行事毎日供奉。仍謂御贖と有る。類聚國史ふ考合をるふ。御不豫あ也。ふ事見えをバ。旧記の傳れ正き事知ふべし。又毎月晦の御麻御贖を。天皇ハ申ゝも更ふり。中宮東宮ふ奉る儀た。四時祭式。まと本朝月令ふ引る。弘仁内藏式。貞觀式ふ見えとふゞ如し。まと臨時ふ此。政を行たせ賜ふ事ハ。政事要略ふ引る多米氏本系帳ふ。成務天皇の御世ふ。小長田命ふ御飯を作備し。免賜ふる事をいひて。爾時賜大歃炊の誤ふ。示任御田之職。天皇御贖之政掌。以仕奉也と見え。仝系図ふハ。爾時天皇御命贖乃人乎。四方圍造等献支と有。もて。遠神代ゝ也の御政ふるをも思ひ辨ふべし。さて後世ふた。假初の行幸ふどふも。御麻を上り。反閉ち事も仕奉る由ふるを。御麻ゝ本文ふる御贖物の略式ふるふと論ふく。反閉ハまと禹歩法とも云ひて。元玄家ゝ也出ふ方ふて。歩法ふも異說あふふど。師說ふ依て。別ふ記おれる物あり。○於天神地神奉幣帛。玄道云。天神地神ハ釈ゝ。

己く上百三十五段。ふ見えと也。天神國神とハ。記傳の說れ如きふを論ふきを。儀式帳解ふ。

国津社を有を釈て、天津神に対する国津神よりも非び、当国乃神といふ意なり。古事記等よも、当国の神をもいふ例あり。令集解に自天而下坐曰神也、就地而顕曰祇と有るを引て、土地に附たる功徳に依て、祭きるをしるして、山城国風土記に宇治郡木幡社、祇社、まと久世郡水渡社、祇社と記るも、全意なるばし。とあるハ、家にちる説なり。

幣帛も。上第五十三段。ふいぢ。拾遺集に、貫之、神祭る宿の卯花白と牙のみてぐらとぞあやまとれハ。源氏物語明石巻に、色くれみるぐらさゝげさせ賜ひて、住吉の神近くさらひを静のに守り賜ふ。家にあをを垂き給ふ神あらバ、助けとまへと多くの大願を立給ふ。標澪、巻に、みてぐら奉り、程ふつけとる願をもあり。おどめあり。此御禮に大嘗祭式に。凡大祓使発訖即差遣供幣帛於天神地祇使。貞観儀式には、発遣奉上天神地祇幣使を見も。大神宮。諸王。五位以上一人。中臣一人。忌部一人。卜部一人。五畿内一人。儀式には、山城、大和、摂津、各一人、河内、和泉、一人を見え、北山抄にもちらあり。七道各一人。中臣齋部、

両人供之。○儀式には、中臣齋部、二人、相半差之とあり。北山抄にもちらいひて、儀、全二季三省、輔復設、両所五位以上、座、又両所、勾当、内侍参向、若依、觸穢、等不行者、次月、上旬行之、と見えと。其幣法大所。此ハ名神大とある御社あり。各絹五丈。一作尺。五色薄絁各一。一作三。尺。絲一絇。綿一屯。木綿二両。麻五両。小所。此ハ官帳に入賜ふ常御社をいふ。各絹三尺。五色絁五寸。此五字ハ今本に脱とるを。伯家部類に見えと正安三年八月の文書に依て、今補て引れ。絲一絇。綿一屯。木綿二両。麻五両。曩薦。總九十枚。並以大藏物充之。大所。小所。並諸社。預祈年祭者。縄七十了。了を正安の本に連とあり。夫五十二人。杁五十二枚。おゝに当色三具と。彼文書にあり。を見えるる是にて。大所。小所をは。正安文書にた大社小社とありて。即神名式に。天神地祇總三千一百三十二座。おの中に。社二千八百六十一處。中に。宮を申ぬも。坐せるおとおぞ。

有識者の考へ此如し。前二百七十一座。此を委く分てば。大四百九十二座。の中三百四座。並預新年月次新嘗等祭之案上官幣就中七十一座預相嘗祭○名神祭式に三百六座まに即ち其の御社々一百八十八座。並預新年月次新嘗祭○以上國幣○以上ハ謂ゆる大所あり。小二千六百四十座。の中に四百三十三座。並預新年案下官幣二千二百七座。並預新年

○「おき即ち小所あり」寛平五年三月二日の格に二月新嘗祭等者國家之大事也欲令歲穴不起時令順度頒此祭神京畿外國大小通計五百五十八社因茲特致潔齋慎令祭祀とある數をは合計たばされば式の御定ハ此を引出る元慶紀ハ合ハばあれ或説に類聚國史に延曆十七年九月癸丑定可奉新年幣帛神社先是諸國祝等毎年入京各受幣帛而道路僻遠往還多難今便用當國物とあり此時並て國司祭の如くせさせ給ひし也其後の世くに改革ありしと三代格に見え此式の時ハ延曆の旧に復し給ふるあり但し西宮記に延長四年官符云新年月次新嘗祭幣帛物不受之國朝集公文自今以後宜令彼官物勘畢移省と見えとるハ中度其式革りと雖ふて翌る五年十二月奏上の式に旧に復し給へるあり。ふ法を西宮記ふの祭れ處に近社幣祝來請遠國幣納官庫付朝集使とあきバ示後に延長四年の官符の如くふあさきとめを有る如く屢沿革有ふあり。を有を。陽成天皇元慶元年二月九五日紀に。分遣中臣齋部兩氏人云く。班幣境内天神地祇。三千一百三十二一本に四ふ作る。神縁供奉大嘗會也。また仁明天皇天長十年清和天皇貞觀元年紀にも此御使有て下條に引出るが如し。を記されをよをく符。此社また大小とある事あどハ師説に社と神の住せ給ふ屋代の義ふて木れ茂り並樹る所謂社地を云ふ言ふ社二千八百六十一處と書きとは處字の義を思ふばし法と萬葉集に母里を云に社字を書き或た神社と書るも此由あり座た玖羅と訓て神の坐まに御座を云あり云く神等を大を小とに別を御會釈ある由にて所謂大中小社の由にた非ば其た大中小社のおを衛禁律に闕入大社門者徒一年中社小社各減

三等と見え此文を法曹至要抄に引て案に称大社伊勢大
神宮八幡宮也中社者加茂住吉社之類也自餘小社也而
關入之時皆得其罪但中小社有所減而已を見とる所
了大四百九十二座と有て大は伊勢大神宮八幡宮より限
ら所謂大中小社を云は一社も無まぢれ已故考ふる了律の
よ中社を云は一社を古くより自然る階の有しを律の
御撰の時ふ其侭了用らまりむを位階を授奉已給ふ事
始めを後より其位階より依て大中小の階ゑ定られ々り其
た光仁天皇宝亀二年の太政官符に大中小社差別事太
政官符神祇官並五畿七道諸国司應早定置天下諸社大
中小神殿雑舎瑞垣鳥居並四至内地町數事正一位正
位以上以爲中社正五位從五位
以上爲小社大社從三位從四位以上爲中社正殿一宇高一
丈支長一尺在板敷戸一本堅魚木八丸長五尺徑九寸千木四
支長一丈三尺瑞垣一重方二丈高七尺珠垣二重方各五
六丈高八尺内外鳥居二基内一本高九尺口徑八寸外一
本高一丈口徑九寸三間檜皮葺正殿一宇高七尺五間外舍二宇
板敷戸一本五間草葺拜殿一宇高七尺五間板葺幣殿一宇高八尺
間宇高八尺一本五間板葺直會屋二宇高七尺五間板葺儛殿一宇高七尺
草葺盛一本五間板葺拜殿一宇高七尺三間板葺幣殿一宇高七尺戸一
葺盛字おし屋二宇高八尺在戸一萱葺板倉二宇高一丈一尺在
本左右板葺廊

二宇各高七尺五間外舍二宇高八尺五間馬屋二宇中社
四至限八町三間檜皮葺正殿一宇高一丈一尺在板敷戸
一本堅魚木六丸長四尺徑七寸千木四支長一丈瑞垣一
重方二丈五尺高七尺珠垣一重方三丈五尺高八尺内外
鳥居二基高八尺徑七寸三間板葺幣殿一宇高七尺戸一
本三間板葺拜殿一宇高七尺五間板葺儛殿一宇高七尺
三間板葺直會屋二宇高七尺五間外舍二宇小社四至限
四町二間板葺正殿一宇高八尺在板敷戸一本堅魚木四
丸長四尺徑七寸千木四支長八尺珠垣一重方二丈高五
尺鳥居一基高六尺徑六寸三間草葺拜殿一宇高七尺
間板葺儛殿一宇高七尺五間雑舎二宇高七尺右被左大
臣宣偏奉勅諸国神社正殿雑舎並四至町數所定如件宜
仰在国司以正税物數令造進自今以後不可違失若有破
損者應令社司修造無其勤者科大祓解却見任官宜承知
依宣行之符至奉行正四位上行○大辨兼右兵衛督藤原
朝臣百川左一本ゑ右了作る大史外正六位上阿倍志斐
連東人宝亀二年二月十三日と有も て知ばし お此官符
ゑ下し給ふ法と度會家行の類聚神祇本源ゑ見えゑ
め但し此事御紀了も類聚三代格ふも見えば後ふ聞えと
ざる御制おるゑ就ておわ考る了此は其社の位階ふ依

て四至の限正殿の大小をも定らまさる故よ遂て行ぬまちめ志を所思さ巳制発給ヲ流までふて遂行はまざる事も多く其格は三代の格流も御紀了も漏されさるゞ傍の書よ見えたるも彼此あ巳そそまづ神ふ位階な捧奉ら流、事いと上古よ制奈よ事ハ言ふも更奈るが天武天皇紀云く此そ第一巻よ細ふ記さまさ巳是とめ事起巳て宝亀二年までふ次く諸神了位階な授奉らま志故ふ彼大中小社差別の官符を行ひ給ゑちむ然る了此事御紀よも三代格よも見えざるは此後此御く代く系和嘉祥負観元慶の頃了神階の叙位加上いぞ多有しのば其叙位加階あるおぞふ彼官符此加く位階相當の殿宇まさ四至此限をも改発む事ハ容易ゐらは煩は志けまバ遂行それは宣ひ出さるまでよて廢ゑまれむ故ふ御紀よ記し漏ま格典ふも載ざ巳れむな其案此さまたま残ま流な摭ひて神祇本源ふ載せ流奈らむ此事よかぎらは餘事よもか、る類志れかま有り斯在ぞ律了いそむる大中小社の定発と古よ據られ彼官符おる大中小社の稱ハそ此古例を用さまぞ旨別奈巳と知はく神名帳ふ大小とあると律奈るとも官符おるとも異よ志て此も稱そ古了據奈がら唯了大ぞ小とよ別て御會

釈ひ坐は由なも尚委く説まさ巳又或説ふ志呂をハ堺を限り標定たる意おりとて田よ幾頃をいひ標定さる地よ種を蒔て苗な生する所な苗代といふも其料よ標定さる田也纒向日代宮と申はも檜原の辺なまバ檜原の義ふや城を志ゝいふも同意なりさまバ宮地をいふ稱ふやあらむと云るも棄がさしさて百畝の地な頃とすとも五十歩を十代とすると七十二歩を十代とすをも云ふ説あり又城な志呂をいなハ元山城国和名抄よ夜萬之呂を而れど正くハヤマキを訓奈るを元の山背れ名乃は〵よ呼つると巳終よ城字を訛訓志と巳起れめを云説も有まをそは信がさき志と別よ記せる此ありまさ玉がおまよ史記を引抱て社字を杜とハ形の似さると巳誤まるろはさ相通ふ由有てゐ、るろ毛し杜と社と通はゞも巳了殊ふ由而巳と説ましな或説了名所よ何の杜をいふハ凡て神社の在る所ないふ万葉集中の歌はさ奈はて名所の杜此今ちざゐよ残まるも皆社あるふて知ゐべしさまバ社字とめ轉巳ても巳といふふ杜をも用おさる奈らむ彼国の字書ふ此意曽て見えはまさ社字も社稷を列祢て社をハ土神ないふ此よ奈はて神の在は所を申は意よあらはとも説牙巳さ

て上ゐ見えし御政も、延喜の頃は法式ありなり。御世を經るはゐ、損益あり。北山抄ゐ、於神祇官發遣、仍不廢務、又无宣命、上卿行内印、事不參、彼官唯召官人令請官符、依載可用當國官符也、件幣料式、充大藏物者、而近例官符、依載可用當國正税之由、不充省物、と有れぞ、小右記ゐ引きし、外記日記、天慶九年四月十五日條ゐ、天皇即位ゐ因て、此を奉遣ゐる事を記ゐて、五畿内以諸司物、充用諸國以當國正税、充用之、まゐ使毎道差神祇中臣齋部等也、各給驛鈴一口、但不給畿内使、三條天皇御世ゐも、宣命有無の論も有て、遂ゐ寛平例ゐ依て、祝詞ゐ奉ゐゐ、由有るを始めて、下ゐ引る諸記、まゐ史等を見て知ばし、ちまぞ天下の天神、社地神、社を遍く祭賜ふべき大道ゐ、恐くも天皇祖神れ、高天原ゐる御詔ゐ出ゐる事れ、委く上百三十五段ゐ、説きしの如く於れば、後御世はでも、大のゐ此、御法ゐ因循賜てゐ有ぞ。

ゐ、ゐ謂ゐ法一代一度、大奉幣使ゐるゐ。神祇令ゐ。

凡天皇即位、摠祭天神地祇、云々。其大幣者、三月之内令修理訖。義解ゐ、謂大幣者、供神幣物、各有色目、金水荷田在溝、校本麻ゐ作る。捕金線柱奉伊勢神宮、楯戈奉住吉神之類是也。三月之内者、唯據月言、不以日計、即始自九月終十一月也。修理者此言、新造也、と見え、集解ゐ、釋云、大幣謂供神幣物各有色目也、伊勢大社奉金麻筍、金多々利、住吉奉楯戈之類也、三月之内謂、以月數不計日也、修理新作曰修理也、案祭即位之後祭、跡云、大幣謂各大幣之物名也、古記云、問、大幣意何、答、大幣謂即位之時、摠祭天神地祇、爲祭幣帛、別地卜定、三箇月内令修理、訖此修理而散祭物名、大幣但修理之字得新造名、用也、大神宮式ゐ、金銅麻筍二合、口徑各三寸六分、尻徑二寸八分、深二寸二分、まゐ金線柱は、和名抄蠶具ゐ、絡垛和名多々利、全式ゐ、金銅多々利、高各一尺一寸六分、土居徑三寸六分、万葉ゐ、績麻之太多利ゐぞ是歟。ぞ見えて、上代ゐ荒忌ゐ。三月と定賜ひゐを、後ゐ一月と改賜ふ法事、後條ゐ見るゐ如し。但し右文ゐ、三月之内ぞ云へるゐ、古禮のゐ、おゐとおゐ所思ゐ、後物ゐゐら北山抄ゐ、奉諸社神寶事、先於建禮門前有大祓、兼平二年前日行之、天慶十年當日早旦有此事也、ぞ云條ゐ。伊勢使如例、宇佐並宮中、京邊七社、以殿上人爲

使（或自殿上差定下給或上卿奉仰差奏）畿内諸大夫一国各一人（上卿差定）七道藏人所雜色以下一道各一人（自殿上下給）はゝと諸社神寶蓋劒弓矢梓也幣帛加之大神宮加餺劒玉佩宇佐加御衣二襲（僧俗各一襲）餺劒玉佩云〻（寛弘例前但一社有二座以上者唯奉一前）幣帛如常天慶例宇佐御装束僧俗並后装束及女装束合四襲云〻神寶五十七具伊勢二具宇佐香椎四具賀茂二具稲荷三具日前国懸三具合五十七具石清水唯奉幣帛也○右文は僧衣をしも奉るゝ　おとは寛平の御世ゟ已起ぬ　この大菩薩と申ゝ　大禍事ゝ　ゝ　八幡宮御傳記は説れば今は略ぬ諸道使給官符鈴等人給藏人所牒（全じ裏書は大和五所河内二所攝津五所海道六所山道七所北陸四所山陰三所山陽五所南海二所西海四所合五十所兼平天慶例也宣命五十三卷云〻可尋伊勢二卷日前国懸二卷香椎合有五十三卷）ゝ云ひ左經記ゝも寛仁元年九月大奉幣使の事を記ちまて光日乙卯微雨依可被定一代一度奉幣云〻仝十月二日丁卯終日雨降早旦畿内七道並給太宰宇佐使祿綿官符等仁加署令渡外記次參内可覽神寶等之由云〻頃之參八省御装束等如常巳剋許右大辨被參八省東廊被行大祓（是依京畿七道諸神一代一度幣帛神寶等被奉也）又云〻神寶支配事伊勢度會宇佐二所（宇佐並大多羅志女料也）石清水二所（八幡並大多羅志女料也）賀茂上下紀伊国日前国懸已上十一所各被奉金銀幣各二枚（納平文筥在錦折立）錦蓋一蓋（附四角金銀一本は銅ゝ作る鈴）玉佩一流（納平文筥在錦折立）一尺鏡一面（納平文筥在錦折立）金銅鈴一口（附錦緒）已上八物等納赤漆韓櫃一合以盤繪絹覆以赤綱結之

平文麻桶一口。平文線柱一本。平文桙一本。在鐵身尻。餝劒一腰。附唐組縫物緒納赤漆細櫨在紫色折立以盤繪絹覆之赤漆弓一張。箭四筋。納赤漆細櫨但此外宇佐被副奉御幣竝御裝束等錦二疋。綾十二疋。緋六疋紫六疋五色絹卌疋五丈。青黃緋白黑各八疋一丈木綿。大二斤二兩。生絹二疋一丈。已上幣物等。納赤漆韓櫨二合。在覆綱等法服一具。櫨甲漆穀袈裟一條。加緒一筋。横被一條。赤白橡供養衣一領。五重赤色裳一腰。淺黃縮線綾表袴一腰。大口一腰。紫綾帶一筋。青織物座具一枚。錦襪一足。桙鞋一足。已上物等。入平文衣笥一合。在錦折立以綾畏之俗御裝束一具。綾青白橡表衣一領。綾下襲。竝半臂縮線綾表袴一腰。大口一腰。綾御襪一足。入物等同前太多羅志女御裝束。摺綾唐衣一領。目染薄物裙帶等。蘓芳目染綾裳一腰。各在金銀泥繪御袴一腰。入物等同前姫宮御裝束一具。櫻三重唐御衣一領。摺裳一腰。單袴一具。已上入物等同前。副調布一端一丈。小莚四枚。薦四枚。宮司等料絹卌疋。綿六十屯。調布卌端園竝韓神。稻荷。松尾。平野。大原野。大和國。春日。大和。大神。河内國。恩智。平岡。攝津國。住吉。大依羅。生石上。幸川。吒田。長田。已上不充。驛鈴東海道。伊勢國多度社。尾張國熱田。駿河國淺間。卌。伊豆國三島。下總國香取。常陸國鹿島。東山道。近江國日吉。美乃不破。信乃須波。上野貫前。下野二荒。陸奥鹽竈。出羽大物忌。卌。北陸道。若狹若狹。彦越前氣比。加賀白山。能登氣多。山陰道。出雲熊野杵築。山陽道。播磨伊和。美作中山。備中吉備津彦。安備津彦。伊豫大山津見。西海道。筑前宗像。住吉。筑後高良。豊前宇佐。藝伊都伎島。五十。南海道。伊豫大香椎。石清水姫。肥後阿蘇。已上卌八所。被奉紫綾蓋一蓋。四角在金銅鈴。平文野劒一腰。入赤漆細櫨。赤漆御弓一張。箭四筋。平文鉾一本。在鐵身尻。五寸。鏡一面。在平文錦折立。平文麻桶一口。平文線柱一本。奉除伊勢兩所。竝宇佐香椎等之外者。皆被奉御幣一捧。各絹五疋。錦一疋。糸一兩

畏以薦ゝ見え神祇官年中行事ゐ御即位由伊勢奉幣云ゝ全由天神地祇大奉幣神三千一百三十二座使左右京職一人五畿内一人七道各一人神部各二人件使以中臣齋部氏人差進之隨官催進之はと大嘗會條ゐも大奉幣宮中京中京職使一道各一人中臣忌部卜部伊岐氏等差進之とあるを全事を再度舉さるゆゑと思ひしゝぞ後よハ二度奉坐せゆと聞えて百錬抄後鳥羽天皇記ゐ元暦元年十月九日甲子御即位大奉幣也まと十五日庚午被立大嘗會大奉幣使と見也ゐ有ばき事今記えさるを舉ゆる也されぞ上代よハ必一度ゐゆゆむゐと前後よ引出はゐ記文を見て知らはめゆまと右よ引る正安文書ゐ御即位大奉幣之記「神祇官」とて五畿諸道の諸社を記して件如く大社云ゝ小社云ゝ右依官宣所勘申如件正安三年八月日從三位行伯業顯王正六位上少史齋部宿祢業親と見也此ゝ後二條天皇御世のゐて皇代記皇代略記ゐぞよ正安三年「御年十七ゐて」三月九四日即位官廳全年十月九八日甲午御禊十一月二十乙卯大嘗會近江備中と見えて權中納言實躬卿の大嘗會記あまぞ缺文有て全のらば形を有るゐも能符合ばゐゆ。ちるを令抄よ上の祭天神地祇とあはゐを式文卯日云ゝ謂祈年奠幣案上ゆゐるを引證して謂祈年案上者也三百四座とあまど上よ引はゐ式文よ大所小所と有よ符合ば彼ゆ此とは異ゐれど都て信ずべし。はと儀式帳解ゐ神庭了此を奉らゐゝ事を記ゐて江次第ゐ一代一度大神寶次第をゐるし朝野群載よ一代一度大神寶奉る告詞あゆ雜事記延久元年十月云ゝ以去十二日同大神寶物等令奉給件大神寶使中臣權大祐惟經等也類聚大補任嘉祿元年の條ゐ元仁二年正月九一日大神寶使中臣權少祐永親長則神事供奉記よ寛元四年十一月九二日夜大奉幣使參宮文永遷宮記

ゐ。幣物用殘注文。大神寶使一箇度八端。年中行記の條ゐめ。大奉幣使參宮行事をあるおまをゐ。氏經卿日次記。文正二年三月十七日。祭主下知ゑ。大奉幣于今無奉納。事不可然。後竝月次祭可被付行也。且存知且可被告知二宮ゐぞも見也。ゐゐ此事。右の江次第。延久元年四月七日御禮を初めて。家記類ゑ。あまゑ見えおまを。煩々れば今ゑあべば。○差遣抜穂使卜定稲實齋屋而は。玄道云。奴伎保都加比遠。佐志都可波志。伊那美能。伊美夜遠。宇良閉佐陀米氏ゐて。貞觀儀式ゐ。次神祇官。卜定抜穂使。申官發遣。稲實卜部一人。祢宜。卜部一人。○式ゑ差宮主一人。卜部三人。發遣。と有て。此四人をかゝ名れて遣をしゐ。到国幸国司。於齋郡大祓。齋郡司竝百姓。示預焉。其料各馬一疋。云く。祭料ゑ委く舉られたまど。今ゑ略きおゐ。下此ゑ倣ゐ。祓畢賜直會酒肴。次使與国司共卜定稲實殿地。即以木綿繋賢木。賢木ゑ上天窟戸。段ゑ見也。神延ゐゑ賀茂社の齋王をト。定賜ゐる時等ゑも。のく木綿著とる賢木ゑ。寢殿四面をも内外門ゑ立と。式文ゑ見え。万葉集三卷ゑ。奥山乃賢木之枝爾白香付木綿取付而。ゐぞをみてともゐ。古礼ゐること申ゐも更ゐゐ。立地四角。次卜定御田六段。田。稱。大田。稲。稱。撰子稲。○式ゑは。凡。拔穂田者。国別六段。用百姓所。営田。其代以正税給之とあゐ。即使及国司向御田。以木綿繋賢木。立田四角。令夫四人守之。次卜定物部人十五人。男六人。女九人。云く。此ゑ傳。文ゐ採て。下ゑ委く釋をおゐバ今ゑ略き。次賜使明衣料絹。式ゑ絁とゐ。明衣の事ハ下ゑ云ふべし。二疋。綿八屯。布式ゑ調布ゑ。二端。人別絹一疋。綿四屯。布一端。用国物。次鎮稲實殿地。其料各五色薄絁。云く。已上用国物。鎮畢使執齋鉏鎌。艾除草木。始掘柱穴。

其院方十六丈。以柴爲垣。高四尺。以楛結之。四節。○或說云。いふ柴を書紀に折取枝葉とある如く。大木にあらぐ。低しくて小枝を折取て。薪を爲ばの巳の木をいふ名なるべし。と云。門在東方。編葦若木一式。編木を爲扉。高八尺。廣一丈。院四角挿賢木。其內搆作雜殿。入門二許丈。縱三間。使政所屋一宇。長二丈四尺。廣一丈二尺。○此も東より在巳。其北横五間。拔穗使宿屋一宇。南戸長二丈四尺。廣一丈二尺。○此も東より在巳。其東横三間。稻實殿一宇。北戸長二丈四尺。廣一丈二尺。其東横三間。物部女等宿屋一宇。北戸長廣同上。○此三ツも南にあり。をたのる是なり。拔穗乃御田乃稻乎。拔穗仁拔弖。長楮乃米仁就弖。御田乃頭仁立弖。云〻。まゝ宇治御田刈拔穗乎。大物忌。宮守。物忌。云〻。竝四人尓自御倉下充奉。外宮儀式帳に。大物忌父我佃奉。拔穗乃御田稻乎。先穗乎波拔穗尓拔弖。まゝ倭姫命世記に。大御神の神宮より。御鎭坐れ翌年の段に。先穗拔穗令拔。半分大稅令苅。皇大神御前懸奉。はゝ皇大神乃朝御饌夕御饌處乃御田定奉。支宇遲田上尓在名。拔穗田是也。と見え。建久年中行事。拔

方一丈。其東横三間。稻實殿一宇。北戸長二丈四尺。廣一丈二尺。其東横三間。物部女等宿屋一宇。北戸長廣同上。○此三ツも南にあり。をたのる是なり。拔穗乃御田乃稻乎。拔穗仁拔弖。長楮乃米仁就弖。御田乃頭仁立弖。云〻。まゝ宇治御田刈拔穗乎。大物忌。宮守。物忌。云〻。竝四人尓自御倉下充奉。外宮儀式帳に。大物忌父我佃奉。拔穗乃御田稻乎。先穗乎波拔穗尓拔弖。まゝ倭姫命世記に。大御神の神宮より。御鎭坐れ翌年の段に。先穗拔穗令拔。半分大稅令苅。皇大神御前懸奉。はゝ皇大神乃朝御饌夕御饌處乃御田定奉。支宇遲田上尓在名。拔穗田是也。と見え。建久年中行事。拔

穂神事條に。早旦一禰宜衣冠著。當卿大小刀禰等相具御常供田參向。御稻穂奉拔。是來十六日御饌料也。おぞあり。

まゝ先穂とハ。清和天皇紀の貞觀十二年十一月十七日詔ふ。錢を鑄て初ゑ。神ゐ奉らゐ、事を。早穂二十文と見え。源氏物語早蕨卷ゐ。ひゑびゐくしをゝしきゐゐ入まて。此ゑひらはゐのくやうして侍る。はゐゐゐゐゐて奉れひ。をもあひて。大御神ゐ奉らせゐ詔詞。万葉集。内宮儀式帳ゐどゐ。荷前といふゐ似さる由。帳解ゐ說るゞ如し。

○祭八柱之神。玄道云。夜波志良能加美遠萬都里を訓む。

おれ右の八神殿ゐて。此を奉祭まゐこをゐる歟。此も仝儀式九月條。ゐ。是月拔穂使云く。次使率物部人。始入齋殿。次祭八神。式ゐ。卽於齋院祭神八座。御歲神。高御魂神。庭高日神。大諸本ゐ大字无。御食神。大宮賣神。事代主神。阿須波神。波比岐神。御歲神は第七十四段ゐ。高御魂。大神ゑ。第一段まゐ四十四段。百六段以下ゐをゞゐ。多く出賜ひ。庭高日。神ハ。七十四段ゐ。御食神ゐ。やゞゐて豊宇氣毘賣神ゐて。十三段。はゐと四十段。四十一段ゐ。大宮賣神ハ。五十七段ゐ。事代主神ハ。第百三段ゐ。阿須波神。波比岐神ゑ。七十四段ゐ見え賜ゐひ。さて神名を本文ゐは注をせまど今は大字をし。神字脫さるゑ誤りゐまバ。式ゐ因て補ゐ。其料。各座別五色薄絁各一尺。絹四尺。倭文一尺。木綿一兩。絲一絇。綿一屯。布一段。鍬一口。稻一束。米酒各四升。鰒堅魚海藻各二斤。腊鹽各二升。並用圓物。式ゐ。凡齋郡之齋院祭神八前。卜部二人。兩圓各給明衣並被。をゝのる是ゐて。上文宿屋一宇と有る。次ゐ。其制也。

八神殿者。爲片廂葺。以青草。內安竹棚。高四尺。其上敷席爲神座。部廻以葦。開東戸。懸葦簾。高萱御倉者。葺部以青草。開北戸。以葦爲扉。內作竹棚。其上敷薦。以安御稻。稻實殿者。葺部。

以青草戸示用草をなる。おまを悠紀主基兩國ゐる。稻實屋ふて。此よる八柱皇神等を崇奉らゐゝ事をく聞えたゞ。

此ゐ使宿屋以下五舍の制ゐも舉ゐまをのを今ハ省き於はゐと此皇神をバ京ある齋場ゐても崇奉らゐゝ事下條ゐ引出るゲ如し。ちてその御稻を刈收もし。まゝ京ゐ持參上ゞ。

仕奉る狀ゐ。仝儀式よ是月卽九月ゐゞ。拔穗使在國率國郡司物部人。擔夫三百人就水濱一作渭而解除訖至御田拔取御稻造酒童女先之稻實公次之酒波次之物部男女次之擔夫次之摠拔得御稻若干束。以四把爲束。○御代始抄よ。拔穗使ゐ。九月よ神祇官人兩國ゐ下向して。齋郡の稻ゐ初穗を拔て。神膳ゐ備ゐむと。各和歌ゐ作ゞて。此を歌ひて。穗を拔ゐゞとあり。乾之納齋院就中以先拔四束別納高萱御倉。會日稻實公所貢稻也。自餘爲白黑二酒料。次使云ゝ。此ハ八神を祭る事あり。上ゐ引るゲ如し。次以韓櫃七合。各長二尺六寸。廣一尺八寸。深一尺二寸。○和名抄よ。櫃似厨向上開闔器也。和名比都。俗有長櫃。韓櫃。折櫃。小櫃等之名。を見え。內宮儀式帳よ。御調納辛櫃とあゐゐ解ゐ。辛をハ美をいふ。韓紅。韓錦。韓鞍ゐの類ゐ如し。實御稻十四束。合別二束。一合爲荷。裹之以薦居筥形。足高一尺四寸。○此物のゐを。內藏式。明櫃の下よ多く見えゞゞ。好古小錄よ。佛光寺子院長性院ゲ。古器數十を傳ふる中よ。筥形一枚あり。を。て図をも出せゞ。籠若干合。數隨稻多少。籠徑各二尺。深各一尺五寸。合別實御稻一束。二合爲荷。荷別有四脚。以木綿賢木。挿籠上。其擔一丁。外更有著榊。相副者。下鋪設示同。夫擔之以若是子弟廻立於內及蓋等訖。附錄よ云。以若以下十二字。不可解。閉齋場門。上道向都。其行列。健兒四人。健兒ゐ。皇極天皇紀ゐ健者あゞ。此を定。賜ひしゐを。延曆十一年の格ゐ見え。兵部式下學集ゐも出。唐六典よ。天下諸軍有健兒。杜甫詩注よ。隨待軍卒也ゐ

ぞ見えて別て記せる物あり。各執白木。體源抄の皇□蘇利古の執物ゝ白楚と見え古事談平家物語砂石集ゝぎゝゝ白杖と云ひ漢圀ゝ白槌白棒といふ類ゝゝまゝ金木培ちぎり木笞杖棒白杖箠笞挺ゝぎ長短竹木鋏製の別ゝそあれ何ゝも鉾のゝき桙ゝと或説ゝゝ左右列立。後陣健兒示同子弟四人。執著木綿賢木。後陣子上弟示同次之。禰宜卜部。當途而列。稲實公著木綿鬘。次之。御稲韓櫃竝籠。次之。毎十荷子弟一人。執白木領之。物部男五附録ゝ據前後文當作六。人次之。子弟四人次之。子弟以下六字一本ゝゝ當郡鋪設當途而列。疊茵各卌枚席長薦各七十枚簀五十枚子弟四人。健兒四人次之。造酒童女駕輿。當途擔丁四人。物部女九人次之。書生一人次之。郡司次之。國司次之。已上乘馬私稲實卜部次之。とあるゝて。拔穗使。まゝ物部男女等の。二國ゝて仕奉ゝる。御政の狀ゝ

ゝ察られたゝ。○物部は。師說ゝ。毋能〻布を訓ばし。万葉一ゝ。物乃布。三ゝ。物乃負。十七ゝ。物能敷。十八ゝ。毛能乃布。れぞゝゝ有ゝ。まゝ三卷ゝは。武士ゝも書て。總ゝ武職ゝ以て仕奉る。健士ゝ稱ゝる。ばゝ朝廷ゝ仕奉る人等を。凡ても毋能〻布を云て。物部之八十伴緒ゝぞ詠ゝも。万葉ゝ多ゝ。上代て。武勇職ゝ主ゝ爲ゝ。故ゝ。ゝて。ゝ。ゝゝ書て。毋能〻辨と訓べきもあゝ。其ゝ神武天皇卷物部連の所ゝ云ふゝ見ばし。○玄道云名義ハ物負部ゝを負持て仕奉るゝ。ちて此ゝ。云初ゝむと思ふ由ありゝ考記せる物あり。の物部ゝ。万葉二十ゝ。毋能乃布能乎等古乎美奈能ゝあゝ如く。此御政て仕奉る男女ゝ人等ゝ云ゝ。儀式て。ばゝ

悠紀主基国郡を始め。齋場及び諸院殿社地ゐぎ。雜くれ事ぎもト訖て。次ニ定物部人十五人。男六人女九人。造酒童女一人。稻實公一人。大酒波一人。大多米酒波一人。粉走二人。相仕四人。燒灰一人。採薪四人。歌人九人。歌女九人。並不ト卜あゐ是ゐゆ。大嘗祭式もおれと同じ。此御政ヿ仕奉る男女ぎ。ゐゐ數十人ある故。別て此十五人ぎ。物部之人等ぎ稱ふ事は。神代ぎ已ゐて。是御祭ゐ專ぎにゐゐ職ゐ仕奉る故ヿや有らむ。次ゝヿ其掌る事ども故說もて行くを見て知ばし。玄道云。仝儀式は。各賜物部人明衣料ぎある條ゐは。右等の外ゐ。稻實ト部二人。酒部一人。駈使四人。まゝ童女一人。物部女八人。酒部一人。燒灰一人。駈使四人。又物部男六人。女九人。總て四十三人の由見ゆ。凡て五十二人ぎ成已て。その數合ねば。若脫文ゐるゐや。○酒造兒ぎ。大嘗祭式ゐ。酒造兒。神語佐可都古。以當郡少領女。未嫁ト食者充之ぎにゐ已。儀式も同文ゐて。造酒童女と書ゐ已。當郡ぎハ。悠紀は。悠紀ヿ當已さる郡を云ひ。主基ゐ。主基ゐ當ゆたゐ郡ゐ云ふゐ已。名義ハ字は如く。酒造兒ぎ已。但し職名はかく稱ゐぎも。種ゝの態ヿ預るゐぎ。下ゐ舉ゐ行事ゐて知ばし。玄道云。そは御稻穗を拔取るゐ初免て。齋場の諸院。まゝ大嘗宮を造らるゝヿを。御飯稻ゐ春ゐも先預る事。次ゝ條ゐ見ゆる如し。或說ゐ。崇神天皇紀ヿ。掌酒此云佐介弭苫と見え。姓氏錄ゐ。坂田酒人眞人ぎ云ヿ。姓有て。掌酒の義まゝ酒部公條ゐ。皆有造酒之才令造御酒とあるをも引已。又神庭ゐ酒造ぎいふゞ有ゐと。下ゐ引るゞ如くゐるを。此佐可都古の轉語ゐやあらむ。儀式ヿ。賜物部人等行列日裝束

とある下に造酒童女、纈纈、表、衣一領、藍地、青草摺、綿、袍一領、女子染、綿衣一領、紅染、單衣一領、白絹、袴一腰、赤裳一腰、支子染、下裳一腰、赤薄機引、下裳一腰、板押羅、帶一條、小刀子一具、錦、襪一兩、皺文沓一兩。

○酒波は。大嘗祭式に。佐加那美を訓み。御酒波。多明酒波を見え。儀式には。大酒波。大多米酒波とて。共に女二人あり。名、意、波を借字にて酒並の。そは酒造兒に相次ぎ並びて。事を行ふ樣に見られぬれど。玄道云、角田氏、說に、或說に、おゝ酒之母實爾とある、酒にも有ゐもをいふ義ありといひ、はた或人も酒嘗にて、造酒人の下に屬て釀終るなきバ、釀と云、に仝意の古言と聞もを說、ぬ、さて天平十二年十一月甲辰、紀に、酒波、人麻呂、また天平宝字六年十二月丁酉、紀に、酒波、長歲、興福寺官務記に、近江、國、高嶋、郡、川上、庄に酒波寺といふゞ見えたり。然て大酒波を。多米酒波と。二名あるは。若くは。大御酒比味酒を司るをぬ。

其稱を二人に別て負せしにや。玄道云、此は實に、おのゝ齋場ある、大多明院ある、多明、御酒を釀るをゆの稱と聞て、或人も云、る如く、おのゝえたぬ、多米を、上第四十段、四十九段などに見え、姓氏錄、多米本系帳等に、成務天皇、御世に、多米、宿祢ちふ姓を賜ふるおとあり、また多米都物、條に說をも考、合せばし、

○粉走は。中臣、壽詞を。儀式にはかく有れど。大嘗祭、式に。篩粉二人をぬて。許布流比と訓ぬ。古く粉を篩ふおを。城走とも云る。此を御酒に入るゝ灰を篩ふ職に。玄道云、角田氏、說に、儀式まと造酒式などを合考ふるに、黑白の二酒に和ぬる、藥灰を篩ひて、粉に成ぬを本をして、彼此に走、廻ぬて、仕奉れるをゆ、負る稱にあるばし、と云、る實に然るべし、今昔物語に、鎭西人の雙六を打て、鬪れにあをいひて、此、髻取られる者ぬ家に、て、下女數ぬて、酒造る粉といふ物を、舂喧ぬれにあに、まと此、粉舂の女ぞも、此、音を聞て、杵といふ物を提げて、おど見えとまど、彼、頃までハ、酒造に用ひし

事明白きよ付て一ッの考もあり下り云試むべし或説よ
云和名抄り篩和名布流比除麄去細之竹器也造酒式ふ
絁篩十條まと絁大篩三條一條篩灰二條篩酒と有るも
白黒二酒はと藥灰をも篩漉云事ありぎよ仕奉るあり同
式よ汁糟一石粉酒一石とあり漉ゐて糟を去りさはゐ粉
酒を云と通也又■殼を去りさはをも搗米の糟をも走ら
せ去りて精米を爲等
ゐも仕奉ゐる也

○相作を師説よ中臣壽詞ふ相候儀
式りは相仕大嘗祭式ふは共作をりめ此等を合せて思
ふふ仕も候を誤りて相作ふはゐしと云ゐたるよ從ず
り然れを今はと按ふよ式のまゝ共作ふても難ふく
む もし此も字れ如く相共り酒を作る由れ名よも
有を ○玄道云中務式ふ見る織部司の下よ機工相作主
計式よ氷頭合作ふど見え儀式阿波國を献る由加物
の中り細螺棘甲贏石花相作十壺祈年祭儀ふ忌部八人
鍛工共作木工各二人ふどもあり類聚國史り客作兒を
有を古くアヒツクリを訓り客作兒をハ齋院民部式ま
と撰集祕記二月下よも見え李唐の代頃れ物よ見えし

字面ふり和名抄ふ揚氏漢語抄云客作兒和名豆久乃比
比止塵芥ゐどよもあり云り和名抄箋註よ按高士傳夏
顧入林慮山中治工客作又趙叔向冥啓錄今人指傭工之
人爲客作三國時已有此語焦光飢則出爲人客作飽食而
己按西京雜記匡衡家貧出爲人客作李義山雜纂必不來
客作兒偷物去能改齊漫錄江西俚俗罵人曰客作兒案陳
從易寄荔枝與盛參政詩撥攪爲下輩枇杷客作兒凡言客
作兒者傭夫也又按川久乃比比止償人之義謂受償勞力
償之也ぎも見也さて此れ贖人の義よて傭人の義ふる
ばく家主の爲よ物を受るぎ相作とも云しふこそ雄略天
皇紀よ共食者をアヒタケヒトと訓て太政官式ふ供養
使二人とある字も想ふばくし或説り主とる者有て共よ
物爲ぎ相某といゆが常よ多ふ此も酒波を相作ぎ共ふ
酒造兒を輔相て仕奉れる也と云ひ式ふ造酒兒先下手
次諸女共舂と有る共字を用ゐて共作と書れとるを思
ふべし此り二人あるい一人れ酒波ふ屬き一人れ多明
酒波よ屬て共よ仕奉ふ事ぎ見也とも云るは師説よ因
てふ已又角田氏云太平記よあひものとて乾とる魚の
入とる俵ぎ船り取積てぎ記し海人藻芥よ近代間物五
斗入十度入塞鼻と見えとるふ依て案ふり酒波ハ酒肴

をおくめ相作ら御飯の膳物謂ゆる御菜魚を調理る職なるはしを說已こて四時祭式み相盛八籠雜海菜雜腊鰒堅魚等之類と見え源氏物語はさ枕草紙今鏡古事談等を始て古く」御粥のあはせ粥漬れ伊ハせまれのあはせなを云るふも上儀式れ由加物のみは能協牙已さてはさ師大人の閑都久里とも訓ま志ら笈埃隨筆み曽丹集ふへつく已の垣根れ雪をさそ人え鶴の上毛を一本み已くげと作め」おもふらむやぎまさ源順朝臣の歌ふ為」おをりみ志らせばもでれ難波」江れ芦閒をわけてあろぶろも一「本了鶴と作め」れ子」村井古巖と云ふハ世の好人ふて古書字多く貯牙し事」充棟な已式目料理古実れ書を數多見志みこの事見えば依て古巖案ふみへツクりをは贄作なるべし御贄をい牙まバ料理字爲し人を志て遠のらざは也とあ已然る字小山田與濟說ふ此歌を引て綜作の事を志て釋はら散木集夏部ふ故大殿れ北政所さめ歌繪字ゑまはめてこまみ歌さみあえせて上おれと有れまぞ庭みへ」をいふものしゑたる所み鶴むろひさてめ空了郭公なくをな女ながめて居ゑはをさ免は郭公なく一聲をしるべふて心をそらみあくがらしれる」又同集戀上ふ大殿の歌繪れ中了男のおらづ

ゑ栽おきてゐさるまへみおひおもひあめまさへをい牙る物あ已おるむがひてためかられ女ひぞ已あゐ所をさえる」おひ志ぞもいざゝはいえじ年を牙て志きのら人字おもばいづるふ」こまらの歌や詞書を考ふはみへはくめさ相作の事了て鶴をさみ合せ志ハ唐土れ相作女を云る也和名抄織機具部み野王按綜機纏持絲交者也和名閑和漢三才圖會み綜音宗和名閑俗云加佐利又云毛知利此與屁之訓同故忌之曰餝乎なぞ見えて試藏相撲れ間ふてハ綜足をも綜臺ともいふこまみ綜箸といふものめて糸をこなさのなさへ經めぐらしてちて機おる也こま字經めぐらばわざしるもれをへおくめをはいふなるべし万葉集竹取翁歌み打栲者經而織布日暴之朝手作尾古今著聞集み青柳のみぞめれ糸をく已れきて夏牙て秋らはさおりぞなくなどもさみてまお絡絲女が糸をおむ死あえせて相作が綜て挑文師があやぞりて織手がえされる也延喜式中務省式諸司員の條み織部司四十八人正一人佑一人令史一人挑文師二人織手四十人機工相作在此數内絡絲女三人をい め挑文師挑文生結綜成文者なるさし職員令の義解集解なぞふ見也織手は機織者也機工は機杼れ具を作

る工也相作ハ綜臺よて糸找經ゑぐら安者也式れ印本よアヒツクリと訓ゐるハひが言也絡絲女は糸をつむぎあえ安るもの也蛤草紙よぬむといふもれほ志きよ志宣まへば志ゝりやぞてたづ祢めをゑてまゐらせろめ志れ苧をぬむぎ給ひ志おと志それも志ろくき志えろまとあるハ絡絲女が志紀ざれさま也式よ相作と書ましら万葉よ安布の安を省て布の假字ふもちひさまむ志ゝよは安幣をよみて安をむぶろるのまさい字書ふ相共也扶也助也など見え延喜式よ共作二人ともあれむ織手を贊相て功を成の義ををまるよてもあ㳒べ志と云巳のの機工相作と有ハ織部式の雜織各條よ織手一人共造一人まさ二人なぞ數志らべ見え齋院式人給料錢條よ夾繡料絹滌作工全相作夫三十九人まさ黒木條ふも夾繡相作夫夾繡師竝相作夫なぞもあれバ決ゑて綜作とも定がさくやそハいのゞあらむ知ら祢どかの相作字を閉都久里を訓る証とは安ばし因て案ふふ上了引る儀式よ細螺棘甲羸石花相作まさ式よ氷頭合作をあ㳒ら決めて和名抄よ膳唐韵云與膳全切宍合糅也今案鹿膳俗云阿閉豆久利是也塵芥ふも此をアへツクリをゝゑる狀の物なるばしそは齋宮式大膳造酒式などよ蠶坏まさ蠶酒まさ蠶料酒汁漕和名抄よ蠶四聲字苑云擣薑蒜以醋和之和名阿倍毛乃まさ搗蒜蠶比流豆木新撰字鏡よ蠶阿刀毛乃をある刀は決て辺字な㳒ばし萬葉集了醬酢爾蒜都使合而鯛願など見えて和合をいふふ似さる心ば牙あ巳厨事雜記よ海月む鰹を酒よ浸志て其汁よてあふべし梨子の汁を取てのきあふばし大草相傳聞書よあ牙ませまさ酒塩ふ子あふるをも鶉雲雀鴨ぬぐみハ酢蓼酒塩よてあふる也料理物語了煮和白和四條流庖丁書よあ牙海月武家調法故案ふな志のらみあ牙鳥羽ぶしの牙などいふおと數多見えしゝバ或む安閉都久里をも閉都久里をも訓るおを明れ志厨も或說よ都久里夜なりと云巳きて安閉む即ち合せふて安閉都久里といふ牙きをのくいふハ粉走稻実等と全くて杉原紙を杉原といひ庖丁刀を庖丁慰手鮑を乃志をれみいふを相似さ巳まさ比惠都久里ふても有らむゝかの神武天皇御歌よ許紀志斐惠泥とある安記傳よ許多聶祢なりと解れて神代紀よ竹刀此云阿乎比衣私記ふも安遠比衣を有まむ比衣を切めて閉をも云ひし了やされぞなね安幣都久里よ從て有るばきの。

式ふ以上竝女をゐゆ。儀

式ふ載られさ法。太政官符ふ。造酒童女。大酒波女。大多米酒波女。粉走女。相仕女を見えて。謂ゆる物部女ふ。玄道云。儀式の行列日裝束を賜る條ふ。大酒波。大多米酒波。粉走。相作各紵青摺單衣一領。緑地青草摺綿袍一領。支子染綿衣一領。紅花染單衣一領。赤裳一腰。支子染下裳一腰。赤薄機引下裳一腰。板押羅帯一條。小刀子一具。深紅染襪一兩。皺文。皆一兩。と見ゆ。

○薪採は。師は加麻藝許理を訓ゆ。さ法ふ從ふ。

儀式。大嘗祭式。共ゆ採薪と書て。伎許里と訓たり。是も惡のらゑ。和名抄ふ。纂要云。火木曰薪。和名多岐ゝゆ。玄道云。主計式ふも。採樵を。伎古里と訓り。

或說ふ。式ふる卯日條ふ。薪十荷を有ゆ。儀式ふ。以黑葛束兩端を有て。常ふ正月十五日ふ供進るゆ。其長仝きを思ふふ。玄道云。儀式ふ。薪十荷。長各四尺と見え。雜令ふ。凡文武官人。毎年正月十五日。竝進薪。長七尺。以九株。爲一

撂と有れバ。此說も取ごさし。大嘗宮の御竈ふて。採薪の仕奉れ法也。ぱと此もト食の山ゆて採ゆらむとて。式文ふ。應採大嘗殿材。竝御膳柏山云ゝゆを有ゆ。卯日條ふ。薪十荷云ゝの次ふ。槲葉二荷を有を以て知るゆも說り。推古天皇紀ふ。交薪。燒於竈。持統天皇紀ふ。薪。私記說ふ。三カヽギ。万葉集十四ふ。多伎木許留。七ふ三幣帛取神之祝我鎭齋杉原燎木伐拾遺集ふ。たきゞお。ふ。薪。ふつみ水くみ。仕丁ぞえし。源氏物語。常夏卷ふ。たきゞ拾ひ給ひ。ゆ。給ひ。ゆ。参り給ひ。ゆ。同じ御法卷ふ。惜らぬ。此身ふ。ゆらめ。限りを。たきゞ。ゆきあむ。おゆの衰しち。世継物語ふ。たきゞ。ふる。こゆハ昨ふつきふしを。今日一本ふ。いざふ作る。をのゝえゆ。一本ハふ作る。此ゆくさむ。拾遺集。枕草紙ふも。此歌見ゆ。職人歌合ふ。や安むとて。おろゝ薪ふ。つみおりぬ。ゆ。ふざふも。人のゆせゆ。ゆ。ふぞあり。人車記。仁安三年大嘗宮點地。條ふ。稻実。公鑽出。火。次薪採者取。松明。炬之。まさ薪採者。以明松。置六所。といふ事あり。

○灰燒ゆ。波比夜伎を

訓ばし。儀式よは。燒灰を書ず。式ふハ燒灰をも。燒炭とも有りて。須美夜伎と訓さ已。然まど此を決免て灰ゐ已。玄道云。内藏式ふ。燒灰四人。燒炭二人を併舉げ。主殿式よ。神二十三座の中。松山三座。炭山十三座とあり。さて或說ふ。炭まと墨を須美を呼ふハ。漢囮隃麋の地を已。墨を出ゑよ已起る。と云る。を信ゲさし。此ハ住火ちふ義ふやあらむ。

そは儀式。十一月上旬條よ。始釀内院御酒云〻。次各玄道云。各字衍の。燒藥灰使造酒司酒部一人。率燒灰竝夫五人。向卜食山祭山神云〻。燒灰料雜物云〻。其住山一宿。燒得藥灰一斛。大嘗祭式ふも。凡造酒司酒部一人。率燒灰一人。駈使五人。入卜食山先祭山神。燒得藥灰一斛を見えて。造酒式ふ。久佐木灰とゐる是ゐ已。和名抄よ。蔣魴切韻云。炭。樹木以火燒之。仙人嚴青造也。和名須美陸詞切韻云。灰。火之烬滅也。波比を見えと已。○玄道云。また大嘗宮を造らふ、よも預るゐと。後條よ見えと。ふの如し。さて酒作者の說ふ。蘖よも灰を用ると聞けバ。御酒及蘖ふ入らふ、料ふふ、料ふふし。○稻實公は。古も今め。伊那能美乃伎美を訓來まり。薪採を已稻實公はで。謂ゆる物部男ふり。玄道云。稻實はまと。伊奈美をも訓ばし。儀式の物部人等よ。行列日の裝束を賜ふ條よ。稻實公。紵青摺單衣一領。紅花染汗衫一領。白絹綿袴一腰。皮子染襖子一領。調布袴一腰。調布襪一兩。皺文沓一兩。と見ゆ。神名式よ。武藏國賀美郡ふ。今城青八坂稻實神社。まと今木青坂稻實荒御魂神社。今城青坂稻實池上神社。三社相竝ひて載坐るを共ゐ。稻實ゐ由ゐる神ふふ。長和元年大嘗會記同殿下よ。臼殿。廣八尺。長一丈。其内東立金稻實翁。切火燒之。著帽子裝

束似鷹飼炊神膳。但し儀式よハ此等ハ伴造の職掌なるおと下段ゟ見えさゟゞ如し。をある如く。專高萱御倉ゟ納らまたゟ。御飯ハ事ゟ仕奉るおと。下條ゟ引ける。儀式ゟ見えさゟゞの如し。熱田宮ゟ傳ゟ曲ゟ稲乃實幹事を見えたり。ちて此物部男女等の。彼此ハ職ゟ。相預ゟおとハ。師説ハ如く。論ゟれれど。大のさ酒造兒ゟ。黑木白木ゟ專を仕奉ア。酒波ゟ。御肴ゟ。稲實公ゟ。神御膳ゟ相作は。御安波世ゟ預り。粉走ハ。御稲まさ御水の事ゟ。灰燒薪採ゟ。御竈御炊の職ゟ專を仕奉ア。おをり。負ゟる稱ゟや有れむ。○皇美麻命。幸ト食川而爲祓禊矣ハ。貞觀大嘗祭儀ゟ。十月下旬。天皇幸ト食川祓禊晩日於朱雀門大祓を有ゟゟ依り

て記せア。延喜大嘗祭式ゟも。凡天皇十月下旬臨幸川上爲禊と見えさり。共ゟお巡く藝命ハ御時を。行ひ來まる古儀ゟる。然ゟ。其大嘗祭儀。くはし。ハ事おを。云まくも更ゟり。ハ精れれを。其を。後風ゟる裝束ゟさハ鹵簿ゟを。謂ゟる唐例ハ威儀の精ゟ。是を神代ハ遺式ゟると。覺ゆゟ事を却て疎くいを憾しく拜讀ら。事をもゟ。ア。其裝束鹵簿まさ百官百司ハ行裝ゟを。皆唐例を摸されさる御舉ゟること。近くハ永和大嘗會記ゟ。凡是行幸ハ大儀を行ひて。千官を從ふ。唐例ゟゟ依りて。群臣唐鞍を用ふ。騎馬の先規ゟを。云ゟを。近例ゟく唐車ゟ乘じて。幸路ゟアさる。定まれる事ゟりと見え。御代始抄も。同ゟ趣ゟるを以て知ば。斯て其唐例ハ儀式ハ。世の有職家ゟを聞ゟる人くれ議ゟ合ふ事ゟて。其考説等ハ。何くれと聞ゟるを。其本をある神世ハ故実を考明せる人ゟきハ。何ゟるゟ故ゟゟ心得がさし。故今を其神政の遺れる殘拾ひて。粗

その趣を説明さむふまぢ卜食川を八太兆の御卜ふ食る川は義あるゞ是時御幸あゆし巻何川ふるの知ぢのらゑ然れど筑紫は国内よりてハ有べきぢゆ。ちて儀式ゑ九月中旬大臣仰神祇官及陰陽寮卜定御禊地並日時奏之をある神祇官巻其官は卜部をいふ下ふ論ふ如く日時を擇ぶこを迹く藝命の御世をゆ既ふ有ぢまバ御禊の日時ゑも擇ぢゆ

ふ故ゑ其例を追ひて卜部ふ卜定巻しめ陰陽寮ふも仰ふる由ふゆ但し神代の當時巻此等は事ぢも都て兒屋根命そは宗源を主りて行ひ給ふる事ふる中臣氏まと卜部は人ども持分れて知を後ゑ其裔ふまを後ゑ令は御制あゆて唐様の百司を立ら巻ゆふを時を陰陽寮も出來ふゆ此寮ふもれふ仰せ賜ふは遙ゑ後ふるふと云ふも更ぢり。ちて如此占

ゑて定巻賜ひしゑバ中世までは御禊は河の何處と云ふを定ぢり無ゆふ歟天長の頃をりふて鴨河ふして行ひ賜ふ事を卜ゆぬとぞ其は近く御代始抄ふ御禊の地上古は定まる事ふし平城天皇巻葛野河ふして御禊あり嵯峨帝ハ松ゞ崎ゑ行幸ゆり文徳天皇は鴨川ふして御禊あゆ其後二條三條等は末を用ひらる近代巻大のと三條の末を點せらる巻見え永和大嘗會記ゑも上古巻鴨河ふ限らぢまぢも天長以來はふく此辺ふ幄屋を設れらる巻有ふて知ぢし○玄道云玉藻ふ建暦元年十月廿八日天皇臨鴨河修禊謂之大嘗會御禊行幸也往代不必限鴨河但天長以來皆以鴨河也巻有ゆまと仁明天皇紀ふる兼和五年三月乙丑條池田春野朝臣傳ふ能説故事或可採容先此十年天長十年の事ふり冬將有大嘗會事天皇欲修禊祓幸賀茂河春野以掃部頭奉鹵簿陣看諸大夫之所著當色其裾曳地大咲曰是尋常之裝束非神事之古体便指自所著爲古体之證其裾離地差高而袴襴露見矣諸大夫皆驚云古之儀制應與唐同後代當倣之巻も見巻まと大嘗會御禊日例を

て、平城天皇をめ、後一條天皇、御世の御事までを記し、仝御禊記事として、仝御世を、花園天皇、延慶二年、十月二十一日の御事までを記せる物もあり、開見ふべし、斯て其河は上ゆ下て、御禊所を定め、其地を頓宮ゆ作らふ。其内は御膳幄、御禊幄と稱ふ。二幄は御構あり。まと陪從の官人あり。諸幄なも設らふ。其を永和大嘗會記ふ、御膳の幄、御禊の幄を、兩所は其構あり、御膳を供せむがため、御禊の幄は、御祓の所なり、と見え、御代始抄ふ、川源の地を點して、南北四十五丈、東西四十丈ふ大綱をひ、札を立る事あり、是を、囲司ふ仰せて、汚穢不淨をいましめ、牛馬の闌入を止めし、其後幄、處をいふ事あり、諸司は著べき、輕幄等を打るゝ也、とも見えたふが如し、ちて儀式ゆ、其平旦神祇官奉路次、神幣、其料座別云ゝゆ有ふ、其平旦とは、御禊の幸あるばき、當日は平旦をいふ、神祇官をハ、當官は中臣部ふ、人を云ふ、御幸の路次ゆ、諸社ふ、幣帛ゆ捧げし、給ふ。此事ハ大嘗祭式ふも、凡行幸爲禊路次辺、神奉幣帛、云ゝを見え、○玄道云、式の仝次ふ、凡行幸、陪從、御巫、戸座、給乘馬、とは、ふの戸座ちふものハ、童男ふて、宮主、御巫と仝類ふ、神事ゆ仕奉るふを、聞えて、上ゆ引れし、延暦二十年、官符ふも、物忌戸座と見え、臨時祭式ふ、凡戸座、取七歳已上童男、卜食者、充之、若及婚時、申辨官、充替、四時祭式ふ、櫟、帛三丈、戸座、服料、冬絁一疋、云ゝ、まと細布三丈二尺、戸座、褌、並構料、まと政事要略ふ引る、官曹事類ふ、養老五年九月十一日、天皇御内安殿、て、井上内親王ふ、齋宮ふ奉賜、ふる儀を、舉て、神部四人、卜部一人、戸座一人、御炬二人、齋宮式ふも、卜部、戸座一人、取山城、囲愛宕、郡、鴨、縣、主氏、童子、火炬二人、取仝囲葛野、郡秦氏、童女、ま、と凡、齋王到囲之日、取度會、郡二見、郷、磯部氏、童女、卜、爲戸座、其炬火、取當郡、童女、卜、用ふ、ぞ見え、類聚三代格ふ、天平三年六月、勅ふ、戸座、阿波、囲阿曇部、壬生、中臣部、右男帝、御宇之時、供奉備前、囲壬生、海部、壬生、首、壬生部、右女帝、御宇之時、供奉備中、囲海部、首、生部、臣、笠、朝臣、右皇后宮、供奉、以前戸座等、給、時服料、云ゝ、元慶七年十二月、官符ふ、應以

官田給三宮㊀主戸座等、月料事、山城国云く、御宮宮主一人、戸座一人、まと大皇太后宮、宮主一人、戸座一人、皇太后宮、宮主一人、戸座一人と見え、寛平三年、官符よ、中宮職、宮主並戸座をあ已下ふ挙る、宮主口傳抄、説を合考ふべし、

かくて、此行幸ふ於ては、預る任しれき給ふる、装束司、次第司ふを稱ふ官人とち事執已、鹵簿を整へて、建禮門を

り出輿あり。御代始抄了、装束司と云ハ、御禊よりおきて兼日れ義まと、點地等れ事を奉行ゑ、長官一人は納言を用ふ、次官一人を中辨を定む、判官二人、主典二人あり、まと次第司と云ハ、行幸よつゑて、諸司百官、悉く供奉ゑる故よ、御前れ長官は、納言参議の中を用ふ、御後の長官ふハ、参議の人を用ふ、おれを御輿れ前陣後陣の、行列を奉行ゑる故ふ、次第司と云ふ、此を唐例を用ひ給ふるを已、後れさまふ、おそ有れ、い上をまり、御代よを、然れ非ざ已しおと云、はくも更ふ、ちて儀式ふ、乘輿御禊所之

後、神祇官奏禊詞、訖遷御供膳所、賜陪從五位以上衣被各、

有差、訖車駕還宮と有て、おを終れ文ふるを、言簡ふ、ゑ、ゑ、御禊れ儀式缺ふるを如し。其は此儀式、まと延喜式ふも見え、ふ、ふ、ふ、故今ゑ御代始抄の趣了、倹ひ、江家次第よ出と、ふ二儀れ中を已、要略ふる文等を抄し出む了、鹵簿頃、至頓宮、節下、大臣就標諸司列立、装束長官以下、迎謁於西門外、南辺東上北面、公卿著休息幕、待駕間、御輿留西門外、祭主進御麻、一撫一吻、返給之。一撫を已以下七字、印本よ注を、入門、次第司以下就標、公卿列立、御膳幄、経幄、南自東面入御、若時尅至則先御、御禊幄、節下、大臣、前後長官等、入門、各著幄、宮主祕事口傳抄よ、後醍醐天皇、文保二年十月廿七日、河原御禊れ儀式を出せるふ、著御頓宮之時、祭主蔭直朝臣、献御麻、先幸、御膳幄、大殿祭、少副齋部平典、權少副大中臣冬親、勤之と有り、まと江次

第れ後儀了御膳幄王卿侍從各著幄座次供御厨子所御膳藏人頭爲陪膳五位藏人役送云々とも見也共了異儀ゐ

主上駕腰輿幸御禊幄自蔀屋西入御大將進候不著靴

自餘王卿立幄前次御百子帳前平鋪座次供御手水主水官人獻之頭藏人傳取奉之御代始抄ゐ河原頓宮ゐ至り て下御ゐらせ給ふ是を已腰輿ゐ免さ也て御禊の幄了移らせ給ひ百子帳の内れ大床子ゐ著御ゐ給ふ百子帳を云也檜榔をもて項ゐ覆ひて四方了帷をうけ前後ゐ開ゐて出入ゐ也べく餝りゐ已其中ゐ毯代ゐゐゐて大床子ゐ立ゐ已此了著せ給ふゐり百子れ名いまゐ詳ゐら ゐ主上御手水の事あ已主水司これを供ゐ其後大床子れ前の平敷御座ゐ移らせ給ふ也も見えゐ已○玄道云百子帳也いふゐ付て煩き說どめ多く聞也也要とゐき事ゐれで此風ゐ說ハゞ次祭主捧一本ゐ献と云御麻授中臣氏女件女本候中隔御屏西中臣女進取之傳進一本ゐ献ゐ作る一吻一摩後返給中臣女

中臣女返祭主祭主授宮主宮主口傳抄ゐ宮主授大麻於祭主祭主傳命婦献之返給事同前也も見えゐり合せ見て其趣了辨ふゞし次神祇官人取御贖物印本物の下ゐ注ゐ了二本ゐ已進之御巫取之又傳進四人印本四人の上ゐ御巫とあり供之宮主口傳抄ゐハ供御贖物一前御手巾一前御輿形一前人形解縄一前散米付命婦進之於御禊幄東第一間進之也見え江次第れ後儀ゐた御撫物貧ともゐり囲之大祓の所ゐ注せる事等をも合せ考ふゞし○玄道云仝抄ゐ供御の上ゐ御巫三人戸座童一人阿波囲卜貢戸座童不上名也云已此ゐ大のゐ御巫也似ゐる職ゐ法ゐ也知るゞゐ古ハ此を閉久良とぞ唱ゐ已れむ次五位藏人獻執柄御祓物被候御座北居之以衝重王卿及裝束司候禊座在御幄南右近陣前辨以下在後座次神祇官置公卿以下祓物言以下居折敷大臣料居葛筥納次宮主就御前南東庭膝突奏解除詞了退出大炊官人散五穀先是件五穀等置宮

主座前次神祇官引大麻於公卿座執柄料五位藏人傳奉諸卿料神祇官行之次御巫撤御前御祓物次撤執柄祓物かの宮主口傳抄ていた宮主著座頗向異勤御祓をも見えさゆ御禊畢又駕腰輿還御御膳幄公卿以下思ひ合せばし著幄次神祇官頒幣帛於近邊諸神次采女供御膳陪膳一人役供六人内膳造酒傳供次大臣令奏山城国籠物次大臣奏見參次賜公卿以下祿次乘輿至建禮門奉御麻還宮儀如恒を有ふて後ふた禊祓をめよ河原ふて行ふ事と成ぬる由を辨ふばし御代始抄ていた大嘗會行はまむをて十月ふ此事あ已豊ねみそだと云ふ世俗よハ河原の御祓をいふ解除をバ河よ臨ミて修せる事ふれず二條三條ね河原ふ行幸ふて是を行ハ添大祀ね一日ふ小祀ハ一日ふゆ大嘗會は大祀さるよ依て十月をゆ御神事あ已川原ね御解除ね御神事を始ぬらふ〳〵由ゐ已大嘗會延引あまバ更ふまと御禊の事あり御禊畢りて腰輿ふ駕して御膳の幄よ歸らせ給ふ晴の御膳腋の御膳ふどを供ぜ其ね山城の国司献物三十捧をを已て庭中よ列立ぬ大臣物名を問てね膳部ていを給へと仰せまと今日ね見參を奏ぬる事あゆ神祇官幣帛を近辺の諸神ていを頒ち奉る事あ已其後還幸あ已さねの如し大臣外記ふ仰せて解陣の鉦を打しむ諸卿以下退出ぬをも見えさ已ちて儀式ね文ていを神祇官奏禊詞と有る是當官ね中臣氏の此詞を奏ぜ由ゐる

ね江次第よ宮主奏解除詞とあふた後ね儀ふ已然まぜ宮主ね卜部氏の卜術よ優長さる故任さ例ふて其卜部氏ハみふ兒屋命を已出たるふまで甚く故実よ違ふる事ふも非ず

かくて禊詞と云名を是を已他ていを古典よ所見さふ事ゐし抑是詞ね祓所ていを坐ぬ瀬織津比咩神速秋津比咩神氣吹戸主神速佐須良比咩神四柱ていを祈白ぬ詞ふて祝

詞式ふを漏されぎ。世ゐ美曾岐詞をいふ物。やごのる其ゐて。大祓詞ゐ。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。とある天津祝詞も。即是れる由は。既ふ云へるゞ如し。第五十九段の傳見るばし。但ゑそれ美曾岐詞と稱ふ物。今れ諸家ゐ傳ゐらふゝ文ぎも。取くゐ譌謬る事ども雑ぢて。其儘ゐ用ふばきれ無きを。己年ゑ。ろ數の本を校合せふゲ有り。凡て此詞ゐ。ゐ。ふ事ぎもも。別ゐ天津祝詞考といふ書ゐ著せまバ。其考ゐおきて見るばし。然ふ字江次第ふ。奏解除詞を有るハ。大祓詞を奏由ふれど。事違ゐるゐ似さまど。此神事はしめ。必まゑ祓處神とちふ。禊詞を白ゑて。次ゐ集れる諸人ゐ。大祓詞を宣聞ゑむる故實ふれば。然を行ひ給ふ例ふる歟。儀式を江次第と互ゐ一方を記ゑて。一方を記し漏せふれ

ゐ。大祓詞ゑ。神ふ白ゐ詞ふ非ぎ。禊詞を。祓所の神等ゐ白して。後ゐ諸人ふ宣聞ゐ詞ふる事ゑ由も。既ゐ第五十九段の傳ふ云へき。ちて此件ゑ初ゐ引さる儀式ゑ文ゐ。天皇幸ゐ卜食川祓禊。晩日於朱雀門大祓を有ふゑ。禊と祓を同時ゐ行ふゑを。高天原ふ事始を賜ひし政ふる故ゐ。その古例ゑは、ふ。行ひ賜ふ由をハ聞ゑれども。此を少ゐ疑ふ。ゐ。ふ非ぎ。を。は河原ふて既ふ禊祓とめふ終。給ふふ歟。まと更ゐ其日晩ゐ朱雀門ふる。大祓ゑ給ゑむは。事重ふ。ゐて覺ゑまばふゆ。故考ふふゐ。此儀式ふ記さまし頃まで。を。神代ゑ。ゐ。ゑ例ふて。河原ゐるハ。禊ゑゑ爲給ひ。宮ゐ還御して後ゐ。大祓あ。ゐし例ふる歟。其ゑゆ後ゐハ。禊祓を

もふ。河原にて行ひ給ふ事を爲ひし故よ。江次第ふは。晩日朱雀門ふる。大祓あふ由を云ざるふて。上世を中世と。儀式の易ひれむも示知ばらら爻。若是考ずれ如くハ。前よ一方を記して。一方を漏せり。と云る儀式と江次第を互禊詞と有む。祓所。皇神等よ祈申を非よて。式了奏除詞をなるを大祓詞を諸人よ宣聞ふふやなら。○玄道云。此餘の事をもむ。立返ひ上二十七段。五十九段の傳ふ說れを合考ふばし因云。大祓詞を。中臣祓と。いふとの非ふる由む。鈴屋大人の詳よ論をふ如くふるを。はさかく唱牙しも古く聞えて。古語拾遺よ。中臣祓詞をいひ。延喜八年御記よ。中臣祓有視聽穢詞と記賜ひ。本朝月令よもかくいひ。中臣解除文といふ事ハ。紀私記よ見え。中臣祭文とは。朝野群載よ見えさり。さて此を以下を。師大人の原稿れ闕さまバ。後氣吹舍翁の依れ傷はふま。惶み謹ミも記しつげ。ひせむとれ。いをそらるを。謂ゆる大匠よ代て。物そろしく。ゆぶせくてふむ。

○荒妙。和妙之神服は。阿良多閉。仁胡多閉能可武美曾をを也。纂疏よ。古語荒妙。爾伎多倍。或作和妙。則帛之名。荒妙。則布之名也。此も上。第四十四段。神衣祭條よ出て。そよ傳十。卷ふ委く說ものと。されど。又れろ語出むふ。神祇令ふる集解ふ釋云。伊勢大神祭也。其國有神服部等。齋戒淨清。以三河赤引神調絲。御衣織作。又麻績連等麻績而。敷和御衣織奉。臨祭之日。神服部在右。麻績在左也。敷和者宇都波多也。冠辭考よ。敷ハ織目の繁き意。和ハあどやりあるあをなまバ。美織ふり。石原正明云く。敷よ織目の繁き義ハ。ふらから。ふどきといふ詞の假字を。ふて。繁き意ふ見とる也。を見え。儀式行列の條朱雀門前よ至る下よ。先是阿波國忌部所織麁妙服。神語所謂阿良多倍是也。預於神祇官設一本ふ辨をに備納以細籠置於案上。四角立賢木著木綿。一本よ。著以下の三字ふし。阿

波忌部一人。執著木綿賢木前行四人舁案。並著木綿鬘。並以下の五字。一本ヨ注ヲに。供物未到朱雀門前。預出自神祇官而相侍。供物既到進就繒服案後。式ヨ。阿波国獻麁布木綿付神祇官。元文三年ホる。天皇大嘗祭御祝文ヨ。朕我奉留神衣乎。羽槌雄乃織留文布。棚機姫乃所織留和衣能神衣登。諸神達能御心平介久聞食ヨ。ヲも青筋乃文布乃荒妙乃神服。白綿繒帛乃和妙乃神衣乎。諸神達憐須御心乎。起志受介幸比ヨ云ヽヲも詔賜ひ。まと白綿繒帛長四丈廣一尺二寸。大神宮和妙全之。青筋文布長四丈。廣一尺二寸。大神宮荒妙全之。皆麻を以て。左右の卷ヲ貫通し。頭の方ヲ結合せ木綿を付。細籠ヨ納むヲも伯家部類ヨ見ヲ。釋紀ヨ。倭文形體如何と問る答て。先師申云。古語拾遺文布云。號綾布之類。欽建久諸祭興行之時。大藏省。年預申狀。有青筋文之布ヲ有ヨ。ヲく合ヲ。武烈天皇紀。歌ヨ。渤海能之都波拖。一本て拖ヨ作る。齋宮式ヨ。倭文常陸と見え。万葉集。古今集等ホ。古ヲのホ。はと帯ヲも。古のホ。おのをど卷ホど多く見ヲ。此も上ホ

己ホ引れし。古語拾遺ヨ。神武天皇御世れ事ヲ申て。仍令天富命率天日鷲命之孫。求肥饒地。遣阿波国。殖穀麻種。其裔今在彼国。當大嘗之年。貢木綿麁布及種ゝ物。所以郡名為麻殖之縁也。ヲ有るぞ原始ホる。仲資王記。建久五年六月。裏書ヨ云。阿波国忌部久家。還補氏長者。依官人致貞申狀。今日成下了。件忌部者。大祀之時。職主荒妙。御衣之氏云ゝまと。業資王記。承元五年九月の條ヨ。参河国神服。阿波国荒妙。御衣云ゝ。神祇官年中行事ホ。荒妙使。近代不参とあり。己古く彼国忌部氏の後。三木氏といふ家ホ傳ヲし。荒妙を召されるホ。官符ヨ文書數通ある寫を見ヨる事ホ。いとむゝしけまバのい付て。左辨官下。阿波国應早令織進荒妙。御衣事。右權大納言藤原朝臣實泰宣奉勅。大嘗會主基所。新宜仰彼国依例以忌部氏人令織備附神祇官之使早以進上者。国宜承知依宣行之。會期有隨。文保二年宣ヨ因ホ限の誤ホ。不得延怠。永仁六年九月日。右大史中原朝臣在判。右少辨藤原朝臣在判。とあヒ。此ハ後伏見天皇の御代

あり。はと太政官符阿波国司使從五位下齋部宿祢○継神部貳人右得神祇官解偁爲令織進大嘗會荒妙御衣差件等人依例申送如件者国宜羨知依件行之符到奉行修璽蠟使衛辨藤原朝臣判正五位行左大史小槻宿祢判延慶二年九月日まと左辨官下阿波国應早速令織荒妙御衣事右權中納言藤原朝臣兼季宣奉勅大嘗會悠紀所新宜仰彼国依先例以麻殖忌部氏人令織備附神祇官被進上者国宜羨知依宣行之延慶二年九月日○大史小槻宿祢判右中辨藤原朝臣判ぞも見も此ハ花園天皇の御代あり。

月上旬。神祇官差神服社神主一人爲神服使。

神服社とハ帳ふ大和国城下郡服部神社二座鍬敷をある社あるべし神祇官年中行事ふ参河国和妙神服使以神服社神主神服氏人差進之と見も○井上頼国云大安寺村の田れ字ふ波都里神を云ふ所社の舊趾あめと云牙ひ今ハ天武天皇紀ふ見えある中道ある村屋神社の境内れ小祠ふ鎮祭まひ然て本社の祭神一座て天之御中主神ふ座し一座ハ天御桙命を祭まる事別ふ考記せり。

申官賜驛鈴一口。

駅鈴て孝德天皇紀改新の詔ふ駅馬傳馬及給駅傳馬皆依鈴傳符剋數云く。そて少納言請進て大主鈴小主鈴出納ふと職員令ふ見え日本紀ふ駅馬駅使まと驛字を波伊麻をを職ふと万葉集十四ふ須受我祢乃波由麻久太利佐ふ馬宇馬夜能云く十八ふ須受可氣奴波由麻久太利佐ふ毛等騰呂尓元輔集ふ能宣が伊勢牙みてぐらの使ふて罷ひたふ。ふぞらきの鈴れ限し有りれバふりて行をしのらぬふ堀川百首ふ匡房あふ坂の関れ関守出て見ふうまや傳牙の鈴きあもあひ。ひど見も或説ふ阿波ふ麻殖と云る。麻を殖さるをりの名伊勢ふて麻績と云る。麻を績て織をひの名あまバ年々の四月御祭料の麻を阿波をひ奉まるを伊勢ふて麻績氏れ織まると同例あらむふ。

遣参河国。喚集神戸。卜定織神服。

るふ参河調糸もて服部氏れ織まると同例あらむふ。但し服部氏の織る和妙の糸ハ参河の御神領をり直ふ伊勢ふ進るもあふ其由義解ふ注られとまと共式の封戸の内て阿波国の无きを思へむ麻績氏れ織る荒妙れ麻て彼国をり直ふ伊勢ふは進らぬふやらむ。

長二人。織女六人。工手二人と見えまと。 中巻

十月上旬。神

服使率服長織女工手等十人持神服部所輸調絲十鉤到來。悠紀主基各五人。次各祭八神。名号見上。○次各祭八神の五字号二字なも或ハ傍書をせり或ハ肩書とせる本もあり。又名とぞ。印本ハ見上の二字なし。其料云〻。まと中旬。次釀大多米酒。次ハ也。各神服使並国司齋場預率服長織女等鎮神服院地。其料云〻。即両国相共造神服院。一院有四屋毎国造二屋。先造酒童女執鋤。初掘四角柱穴。役一本ハ工ハ作る。夫終之。其制也開門南一本ハ東とハ。北両方。北門東一本了東字なし。掖横五間神服殿一宇。南戸長三丈五尺廣一丈四一本ハ二とハ尺。南垣下横五間屋一宇。與服殿相對西服女宿所東二間爲服丁宿所四一本ハ二を尺。以上二宇。悠紀造之。○悠紀の神服院を主基のを東西ハ對ひ宿所屋ハも共了相對る由あり。北門両一本ハ西と。掖横一本ハ縱と。

五間屋一宇。南一本ハ東ハ作る戸。南垣下横三一本了五ハ作る。間屋一宇。北戸已上主基造之。並搆以黒木葺以萱以葉柴蔀之を見えたる殿ハて。織仕奉れる由あり。○国〻之由加物悉備て。久爾具爾能由加母乃。古登古登爾曾那波理ハて。由加物をは。式ハ。凡應供神御雜器。をなる本注ハ。神語曰由加物とめ。神語號雜贄仝爲由加物。北山抄ハも供神雜贄仝爲由加物。あぎを見えて。或人ハ即由伎と同ハを、ハて。内宮儀式帳ハ三節祭ある朝夕大御饌を湯貴御饌祭と有て。まと湯貴之神祭湯貴御倉あぎを見え外宮儀式帳ハも朝乃大御饌夕之大御饌云〻とある下の本註ハ此号由貴と見え祝詞式ハも由貴能御酒と有を証として年毎の新嘗祭の時あるめ神御物ハ由加某と云けむとも天孫本紀ある日子湯支命と申を也其事ハ仕奉ひし名あるぢし。をも說牙り。山野海河雜〻の御贄て更あひ。其

を盛立て奉れる物をもいふ稱あり。そも儀式天神地祇より幣を奉給ふ。式は、八月次文上旬とあり。差宮内省史生遣五箇国監作供神雜器。河内・和泉・兩国一人、尾張・参河・兩国一人、備前国一人、先是所司預注雜器數申官。到国先祓其料各木綿麻各六斤十兩。鍬四口。熊皮二張。已上官物。米酒魚藻之類。国司辨之。即奉五色幣。各一丈用官物。然後始作。此より彼五国の作れる由加物れ數を委く挙らまた物部門部部語部等を進らまし次より。式、文も大のさ同じ。はと神祇官差卜部三人。申官式より。九月上旬をせり。差遣紀伊・淡路・阿波。一本より河内とに等、国監作由加物。各到国先大祓云々。其供神幣物。並作具及潛女衣料。人別布一丈四尺。並用官物。式より。以大藏物充之とあり。但粮以當国正税給之。人別日米二升。紀伊七日。阿波十日。其物造了。卜部監送齋場。分付

兩国。以上の由加物をバ卜部氏の持齋所來て。悠紀主基より附る由あり。但阿波国所獻麁布木綿付神祇官。此ハ下條より出た紀伊国薄鰒四連生鰒。生螺。各六籠。都志毛古毛。各六籠。螺貝燒鹽十顆。並令賀多潛女十人量程採備。主税式より。志摩国供御贄潛女一本より。帛字あり。各五色薄絁云々。山野の物を採りて。各山神野神を祭らせ賜ふあり。決めて此ハ海津見神を祭らせ賜ふあり。淡路国瓮九口。各受一斗五升。比良加一百口。各受一斗。坩二百口。各受一斗。其幣各五色薄絁各三尺云々。此土神を祭らせ賜ふるなるべし。造訖使當国凡直氏一人著木綿鬘執賢木引導。一本より。道阿波国麁布一端。木綿六斤。年魚十五缶。蒜英根合漬十五缶。乾羊蹄。鴟。橘子。各十五籠。已上忌部所作。鰒

卌五編。鰒鮨十五坩。細螺。棘甲贏。石華等。竝九坩。已上、那賀、潛女十人、所作。其幣各一本よ。各字あし。五色薄絁。各六尺。云々。おも山野海河の神よ奉らせ賜へるよ。作具。钁斧。小斧。各四具。鎌四柄。鑿十二具。刀子四枚。鉏二枚。火鑽三枚。竝令忌部。及潛女等。量程造備。其三国造由加物使向京之日。路次国。掃路祇羨。まと式よ。凡應供神供出雲本御よ作る。由加物、器料者。九月上旬。申官差ト部三人遣三国先大祓。云く。其物造了ト部監送齋場分付。両国云く。凡紀伊淡路阿波三国造由加物使向京之日。路次之国掃道路祇羨行列の中ゐも由加物入舁といふあり。をも有り。その齋畏み仕奉ふをを想觀るばし。はと式文よ。凡供神御雑物者。大膳職所備。多加須伎八十枚。高五寸五分。口徑七寸無蓋。折足四所別盛隠岐鰒烏賊各十四両。熬海鼠十五両。魚腊一外。海菜十両。塩五勺。○儀式及式よ。河内国所造。多加須伎八十口と有る是ゐ。高橋氏文ゐ見河曲山梔葉天高次八枚尓刺作利ともあり。鈴屋翁云く。此ら物を盛と云る葉椀を多加須伎よ居ふなり。多加須伎を葉椀ゐ居ふりハ非ず。竝居葉椀。久菩弖。○鈴屋翁云く。葉椀を葉盤と同ゐ物ゐしてゐゐ形の窪く深きが異ゐるゐり。うゐゐ物語俊蔭巻よ。さまざまれ物の葉をくぼてよ刺て。椎栗柿梨芋野老ゐどを入て。云く。又嵯峨院巻ゐ神樂のいそぎの所よ。政所ゐどを入て。云く。又嵯峨院巻ゐ神樂のいそぎ相撲家集ゐ神山の柏れくぼてとさに山を弖。榊もてまゐまを弖。身の榮もばきかゐ和名抄よ本朝式云十一月辰日宴會。其飲器参議以上朱漆椀五位以上葉椀和名久保天と見え相撲集よ神山のかしはのくゐて空穂物語国讓巻よ。大きゐるくゐてを白きくみしゐまとひて五ゐさし入た弖。まさいの弖ゐ法ひらて。くぼてよハゐぎゐ。祝きゐとも。九ろびゐりゐ。かさまよ。神のおゐ安る。くゐてとれとぞ。二條大皇太后宮大弐集よ。くぼてのふとゐ。ゐき女の手ゐて。云く。ゐど見え。又式侍中群要ゐどよ。窪坏をあるも全じ。瓦器も木器めあり。て。今壺皿と稱ふ物。その遺制よやを士清説ゐ弖。覆以笠形葉盤。比良弖。似笠形。○和名抄よ。漢語抄云。葉手比良天。神武

天皇紀に葉盤とある。鈴屋翁云く、延暦二十年の御制の祓物は中「上」に引り。にも柏十五把、「枚手六十枚料」柏十把、「枚手四十枚料」柏五把、「枚手二十枚料」外宮儀式帳に大御饌に供奉御枚手五十六枚、に湯貴進御枚手合千二百六十枚なぞ見也。字鏡に蘇蓀蘇瀟などは字を久菩天又比良天となにハいを心得以比羅傳と云る。久煩弖に對ひさに名にて、淺く平なる由なる。其形、右の式に笠形となるにても凡にを知べしちて其る書紀に葉盤を書になる如く、葉を刺合せて作れる物なり。書紀釈に葉盤柏葉に盛物也とあるをいさゝゝさがけり。此にも作と為れバ為バに柏葉に盛を云にるゐらひ神樂歌韓神に也「比良天乎天尓止利毛知天」愚管抄にやむらばる八枚の「平盤」なり。柏葉にて刺て神供を盛る物なる。恵慶僧が哥新勅撰集に出み霜枯や樒の廣葉を八葉盤に刺とぞいそぐ神のみやお士清云格に枚手と書。今大嘗祭の葉手ハ柏葉を竹の針にて盃形に圓く平く造れる。釈に柏葉に盛物也をいける日中行事にひらもり、類聚雜要及今俗に手盤と稱物ハ此遺制なるべし。建武年中行事にひらではおの御飯見也

以木綿結垂装餝比良須伎八十枚。高及口徑装餝與多

加須伎同。但足不折。別盛具物種々。別五合。○高橋氏文に見眞木葉天枚次八枚刺作天。掃部式に十一月上旬葺蔀大膳職多加須伎比良須伎屋及廻立殿上葺苫下蔀席薦儀式及式に河内国の所造に比良須伎八十口とある。鈴屋翁曰、比良須伎とハ足なき故の名なり。足不折とハ折足無き由れるろくて比良須伎に居る物も全く葉椀に盛る葉盤を助役にれにべし其事を云ぢるゝ與多加須伎全と云におるさにべし

山坏四十口。別盛

貽貝鮓鰒鮓各一升装餝與比良須伎同。○賦役令に貽貝鮓三斗鰒鮓二斗土佐日記にほやのつまのいすしすしあはびと見ゆ

麁盛白筥三百合。長一尺五寸廣一尺二寸㴱三寸

盛東鰒筥五合。別納十斤。○和名抄に本草云鰒一名鮑和名阿波比清魚也。延暦儀式帳には鮑字を用ひる

隱岐鰒筥十六合。別納十二斤。

熬海鼠筥十六合。別納十二斤。○海鼠ハ上百四十一段にいお

烏賊筥十二合。別納六斤。○和名抄に烏賊和名伊加

佐渡鰒筥四合。別納十斤

煮堅魚筥十五合。別一籠不開。○和名抄に鰹漢語抄云加豆乎式文用堅魚二字。賦役令に煮堅魚廾五斤堅

魚煎汁四升。堅魚、笥二十四合。別納十二斤。腊、笥五十五合。別一籠不闕。○和名抄ヨ。腊和名岐多比。乾肉也。與理刀魚、笥十一合。別納一斗五升。○主計式ヨ。與理度魚、鮨ましと與理等魚、腊あどあり。○源頼囲云。本草家の説ヨ。本草和名及和名抄ヨ。與呂都一名波利乎。と同物として鍼魚了充て。今云さよりを云。魚あり。と云。鮭、笥二合。別納一隻。○和名抄ヨ。鮭魚也。昆布、笥四合。別納十五斤。○和名抄ヨ。水松。和名美流。和名比呂米。一名衣比須女。海松、笥六合。別納六斤。○和名抄ヨ。揚氏漢語抄云。海松。和名抄ヨ。紫菜。和名无良佐岐乃利。俗用紫苔。海藻、笥六合。別納六斤。○和名抄ヨ。海藻。和名尓岐女。俗用和布。本草和名ヨ。和名之末毛。一名尓岐女。一名於古。一名金衣。和名太知波奈。搗栗子、笥五合。別納一外。○和名抄ヨ。兼名苑云。橘栗扶。和名久利乃之不。栗刺。和名伊加。一ヨ俗云久利乃以加と見。本草和名ヨも。栗。和名久利。橘子、笥十合。別納十蔭。○和名抄ヨ。兼名苑云。橘子。和名久利。まと扁栗子、笥五合。別納二十籠不闕。干柿、笥二合。別納五十連。○和名抄ヨ。柿。和名ヨも。梨子、笥五合。別納一斗。○和名抄ヨ。梨子。和名奈之。楪栗子、笥六合。別納加岐。削栗子、笥二合。別納二斗。熟柿、笥三合。別納一斗。柚、笥二合。別納三顆。○和名抄ヨ。柚。カリ一名橙。和名由。勾餅、笥五合。○和名抄ヨ。揚氏漢語抄云。糰餅形如藤葛者也。和名萬加利土佐日記ヨ。まゝりのれを。末豆子、笥五合。○和名抄ヨ。大豆麩。和名末女ちのゝさも変らざりを。大豆餅、笥十合。○天平古文書ヨ。万米毛知比と見也。和名抄ヨ。餅。和名毛知比。まと餻字示作餻。和名久佐毛知比。小豆餅、笥十合。捻頭、笥五合。○和名抄ヨ。揚氏漢語抄云。捻頭。无岐加太。一云麥子。或説ヨ。糰餅結果。捻頭。各因形命名。其實一物耳。とも云ヲ。粉糒、笥五合。已上六種別納六枚。○和名抄ヨ。粉糒。和名於古之古女。文選注云。以密和米煎作也。或説ヨ。粉粉。即糰餅。非於古之古女。於古之古女。古女。新猿樂記有尾張粉。即餡餻也。拾遺集有尾張祭畢。山坏已上。皆置山野淨處。餘、

皆頒（此字山田氏按ずるに因る）給諸司造酒司所備等呂須伎十六口。（別酒五斗）都婆波三十二口。（十六口別酒一斗十六口別五升各以八口置一案○此神酒のおとハ外下黒木白木條ずるに說ふなし）壓八口。（口別酒一斛五斗各置一案）匜六十口。小盞六十口。（已上各盛筥置案○和名抄ずるに漢語抄並俗用槌字所書未詳或說云此器有栖半挿其中故名半挿也と見え內宮儀式帳ずるに御波佐布匜二口まと御波佐布六口をも長あり。まと盞方言注云盃之最小者也和名佐加都岐）

女柏一筥。（置案○造酒司式ずるに長女柏匜八把とあり屋代弘賢云まと長柏とも云ひどのずるに傳ずある事は無をど今在る所の物を以て此ずるに當ぢき物二種あり一は槲の一種ずるにおわのちはとて長一尺餘の葉あり一ハおわばらそとて此も一尺餘有るもの也商州厚朴ず如く鋸齒ずあらき物あり）

祭畢。都婆波已上。亦置山野淨地餘皆准上須給をもあり。（このくいと茂し き御供物なるを下條ずるに比校るずるいのふあて此を奉賜ずるふやいまど考得ぢをき人よく攷ずてを）さて大祀ず

用ゐさせ賜ずる料稻ゑ式ずるに凡大嘗會雜用料稻者。圀別元正稅一萬束。及卜食一郡調庸中男作物當郡有封鄉者。以他郡鄉相替給之。若兩圀更有請稻者。臨時處分。隨申元之。（其代加舉正稅取利補塡と見え。儀式も全くて宣旨案もあり。）はと凡會所請借雜物奏正稅稻並絹布綿錢米等類。行事並圀司五位以上署名。自餘輕微之物。不署直奏と有り。さて淳和天皇紀ずるに彼御世ずるに別ある。御儉素ずるに從てせ賜ひうず。二圀合せて三十万束を用ゐさせ給ふ由ある。件數を相合てば。故熟案ふずる。儀式。太政官符案ずるに。某（一本其ずるに作る）道諸圀司。應運送（一本進ずるに作る）大嘗會所雜物事。右被大臣宣偁。會料交易雜物。宜差

傜夫依例一本は件とに令運進者諸国宜宜字一本ふなし兼知依宣行之また某おの某字まと下ある二處れ某字とも一本は其了作る国稲若干束云く宜充大嘗會某所雑用料但彼代者來年出舉依數令塡者まと正税稲若干束右爲充大嘗會料募當年公廨彼国所所字一本ふなし請如件大臣宣奉敕宜充之者国宜兼知依宣充収まと大嘗會某所牒山城国司應採薪五百荷ともまと河内和泉尾張参河備前まと紀伊阿波淡路等の国をも由加物を召上賜ひおれ上代の御礼と聞えしおとハちる物よて天下諸道国司竝太宰府ふ命せて應交易進雑物官符等もあれバ上代ハ大らた二国ふ多諸物を擬行れを

ふを人民の勞苦を憐給ふやぱさらく諸国ふ仰せらふる御政やら成ふふやちてその全數ハ幾千といふ事知ふばき便おおものらいとも嚴重おる御大典ふおそれおはふ、この○悉ら上四十三段ふ出○備も上四十段ふ作具而五十二段ふ設備而おぎあ也其處の傳ふ委く見えとゆ

○鐵胤云吾先人の雅誨語ふ我ゐの天津神御子命の大御政ハ大本ら御祭事おるおゆを申ゆも更ゐるを其御祭事の中ふも大嘗祭ゐむ又おく最め重き大御政ふぞ有ける宣ひつらふを也誰も彼御志を受繼て仕奉れる中ふ撰者を初紀井上頼国おど殊ふ深く其心おらびして此を記ゆをおてハ後の御世くくて益添也ゐむと且

た聞えし事にらも。釣安流海人れうけおら祐ぎ。一ゐ心ふ定免のねゐ、。上代のあさら御政をいゐではふらちぢ洩さじと。晝夜をおく勤こゐ、。懇ふ考へ記ちゐれし儘ふ。のれ長くちき解と成て。二百九張餘ゐあひちゐバ。一巻ふハをぢ免回く。三冊を成る事を成ぬ。の、法例はまざ前後ふあらぢれバ。其由を一ひたひ理め置ふゐむかくて此巻くを堅木の板ふ彫刻て。世ふ弘むる者た。讃岐国那珂郡琴平山ふ鎮座坐に。大神ふ仕奉法。滾見速雄。琴陵宥常。松岡調。神崎勝海等おめ。

定價七十五錢

明治十三年十月一日九上巻出板御届

續考人　愛媛縣士族　矢野玄道　東京府下麹町區下二番町六十一番地寄留

出板人　東京府士族　平田胤雄　東京府下本所區柳嶋横川町十一番地

195
34
111